

あり」とすればよかつた譯になる。

斯様に考へて見ると、單に都邑だけではなく、氣候にしる、産業にしる、交通にしる、惜い所で説き放しの記事が随分多い。又唯内國地誌だけではなく、外國地誌で一國の地誌を説く場合にも同様の缺點がある。併し其の例を擧げて細かに論ずると、此の章が長くなり過ぎるから、此位に止めて置く。つまり字數も、紙數も成る可く切詰めて、書物の定價を安くしようと努める教科書では、抽象的と云ふか、概括的と云ふか、兎に角内容を具體的に示さずに、誤りのない無難な簡結な記事を重寶するのである。随つて鐵道の分布も港の名も狀況も説かず、陸上の交通は不便なれども、海上の交通は便利なり」と決算報告をなし、寒さ加減も、暑さの實狀も述べずに、すぐ「氣溫低し」とか「氣溫高し」と説いて、之が此の地方の交通狀況を誤りなく表はして居り、之が此の國の誤りなき氣

候狀態であるとするのであるが、何となく物足りない感じがする。若しも宗匠連中が地理書を見たならば、地理書には「あすは明日、日和は天氣、兄はわしより年が上」と云ふ文句の様に、誤りがないと同時に詰まらないことが多いと評するであらう。併し度々繰返す様であるが、從來の地理書が世俗一般の人の興味を惹き愛讀を受ける程度に進んでゐないのであるから、實は已むを得ない點もある。かく曰ふ「此の國の氣候は地理の参考書を書いた時に、不本意ながら已むを得ず、此の國の氣候は土地によりて一様ならず。……」と云ふ様な御きまり文句で御茶を濁した覺えがある。どの國だつて土地によつて氣候に變化のあるのは知れ切つたことである。將來地理の参考書でも書く場合には、成るべくかう云ふ無意味な記事を少くしたいと思つて居る。

第四章 排列に関する諸問題

一、尋常科の地理の排列に就いて

最も進歩せる日本地理の排列 地理教授法の沿革を調べて見ると、地理の教授は何處から始めて何處に移り、何で結ぶかと云ふ極大體の教程を定める爲に、色々な排列案が論議せられて居る。曰く分解法曰く總合法、曰く總合分解法、曰く何、曰く何と、様々の排列案を挙げ、其の長所、短所の詮議をするのが例になつて居る。併し現今はそれ等の案を斟酌した上で、教則が大體の順序を示して居り、尙教科書編纂の場合に、稍細かに排列法を考へて立派に仕組む様になつて居るから、地理教授の實際に當る人に對しては、古來案出せられた排列案の一々を述べ

立て、其の長短を詮議する必要の度が薄くなつて居る。それ故茲には排列案の變遷は全く之を省略して、現在採用せられて居る排列法はどうなつて居るのかを先づ考へ、次に問題になりさうなことに就いて卑見を述べることにする。

尋常科で授ける地理の中、日本地理の排列は、從來考案せられた排列案中で、最も適當と認められて居る總合分解法よりも一段進歩した案で、大體の仕組としては先づ申分なしと見てよい。元來始めて日本地理を教へる場合には、總合分解法流儀で、先づ總論として日本全體を大觀し、次に地方誌に移つて、各地方を部分的に授ける。若し地方誌の教へ放しであると、全く總合分解法になる譯であるが、それでは意味が少いから、更に概論を設け、色々な方面から日本全體を眺めて國勢の主要を窺はせる様にす可きものと思ふて居る。大體、事物を觀察する場合

には、先づ全體を大觀し、次に其の部分を探究し、更に再び全體を色々に考察するのが、誰しも期せずして一致する觀察の順序である。譬喻を擧げると早く分るから、今極念入りに初對面をする時を取ることにする。

拭掃除をしてゐた女中がぬれ手を氣にしながら書齋に来て、金田さんが御面會にと取次ぐ。ハテナ金田と云ふ知人はない。ことによると嘗て漱石先生の猫で噂を聞いた鼻で名高い金田夫人かも知れない。若しさうとすれば、ウツカリ出來ないと思ひながら、應接に御通し申して紅茶を差上げてお置きと女中に命ずる。やがて應接室の戸を開くと同時に觀察が始まるのであるが、其の順序は全體の大觀、部分觀察、全體の再視となるものである。即ち戸を開くや否や、オット違つた。男だ。洋服を召してゐらつしやる。大分御年輩だ。と大體を眺めなが

ら座に着く。挨拶をしながらか部分觀察を始めて、頭には白髪が交つて居る。眼鏡をかけていらつしやるが、まだ老眼ではなからう。血色のよい方だ。此の洋服は銀座の山崎仕立てらしい。手の甲に大きな黒子がある。それに二本長い毛が生えて居るが、之も後には白髪になるのかな。と様々の材料を得る。再會を約して別れてから後に、再び金田某を頭に浮べ、部分觀察で得た材料を種にして、年は五十歳前後の分別盛り、顔形よく釣合の取れた上品な人體、身の廻りから推すと中流以上、應待振りにも如才がない。と年齢、容貌、經濟、交際様々な方面から判斷を下す。かくて其の結果、第一回會見に於て、金田某は危険人物ではないらしいと安心するのである。

此の要領を飲込んで、尋常科の日本地理は、最初に「大日本帝國」の章を設けて、我が國の位置、面積、四周、人口等を述べ、次に各地方誌及び關東州

の地理を説き、更に「大日本帝國總説」と云ふ章を置いて、我が國の地勢、産業、貿易、交通の近況を教へることにしたものと見える。それ故尋常科に於ける日本地理の仕組は、大體當を得た排列と見てよい。併し茲で先づ問題になるのは、我が國が其の統治を委任せられた南洋諸島を、いつ説く可きかと云ふことである。

委任統治の我が南洋　歐洲戦争の結果、我が國は國際聯盟から赤道以北に於ける舊獨逸領の南洋諸島の統治を委任せられることになった。そこで此の南洋の地理を何時教へるのがよいかと云ふことは、一應考へなければならぬ。教科書では、尋常六年の外國地理、及び高等一年の外國地理も共に太平洋洲の教授の場合に、之を説くことにしてある。

併し予は我が租借地たる關東州を我が地方誌に准じて、朝鮮の次ぎ

に載せた筆法で、關東州の次ぎに我が南洋の地理を説くことにしたいと思ふ。我が南洋は世に所謂〇式委任統治に屬するもので國際聯盟規約第二十二條中に在る

西南亞弗利加及南太平洋諸島ノ如キ地域ハ人口ノ稀薄面積ノ狭小文明ノ中心ヨリ遠キコト又ハ委任國領土ト隣接セルコト其ノ他ノ事情ニ因リ委任國領土ノ構成部分トシテ其ノ國法ノ下ニ施政ヲ行フヲ以テ最善トス

と云ふ項に該當するものである。關東州が租借中我が國の領土と同視してよいのと同じ様に、我が南洋も國際聯盟から其の統治を委任されて居る間は、我が領土と心得てよいのであるから、關東州と同様に地方誌に組入れて其の地理を説くことにするのが至當であると思ふ。かくして我が地方誌を教へ終つた後、「大日本帝國總説」に移るのであるが、之にも多少問題がある。先づ其の來歴から述べよう。

大日本帝國總説の來歴 予の所謂日本地理の概論は、國定の教科書に於ては、嘗て「帝國地理概説」と呼ばれ、其の後「大日本帝國總説」と改められた章に該當するものである。元を質すと概論にはかう云ふ來歴がある。國定制度の實施後第一に出された地理書の日本地理の排列は總合分解法によつたもので、地方誌の教へ放しであつた。然るに地方誌の教へ放しは意味が少い。何故ならば地方誌に於て、此の平野には米の産出が多いとか、此の山地には金山があるとか、此の海では鯉魚獵が盛だとか、或は此處に何學校あり、何師團あり、此處は海軍の軍港なり、此處は海軍要港なりとか、或は此處は鐵道の中心なりとか分岐點なりとか云ふ様なことを教へただけでは、假令兒童が之を確實に記憶して居るとしても、其の智識は地方的であり、割據的であるから、それだけでは我が國勢の大要を窺はせることが出來ない。宜しく新に日本地

理の概括の章即ち總論に對する概論を設け、様々の方面から日本を眺めて國勢の大要を知らせる様にしなければならぬと云ふ聲が高まつた。と云つても抽象論では其の趣意が明瞭でないと思ふ人もあらうから、具體的の一例として我が貿易を取つて説明しよう。

地方誌教授の際に、著名な開港場の名や、特に著しい港の主要貿易品は教へてあるが、それは地方的、割據的、部分的の智識で、我が國の貿易の趨勢も近況も知ることは出來ないのである。そこで今我が貿易が年々盛況に向つて來たことを證明する簡単な材料を擧げるが、明治の初年我が國が開國和親の方針を執つた頃から可なり長い間開港場は所謂五港で横濱、神戸、長崎、新潟、函館の五箇所に過ぎなかつたが、今は内地に於ける開港場だけでも三十七に増して、各地方で少しく名の知られて居る港は殆んど皆開港場になつて居る。即ち七倍以上の増加であ

る。貿易額を見ると、明治元年の我が貿易総額は二千六百餘萬圓（二六、二四六、五四五圓）に過ぎなかつたが、大正十一年の貿易額は三十五億二千七百餘萬圓（三、五二七、七六〇、〇五〇圓）に上り實に百三十四倍餘の増加である。無論斯様な數字を諸記させる必要はないが、古今を對照すると、其の發展の著しいことを悟り、貿易から見ても國勢が盛になりつつあることを知り得る。唯輸入超過の年が多いから、贅澤奢侈に流れない様にする警告を加へる必要はある。

或は我が國の陸上交通機關の一たる鐵道にしても、明治五年に始めて京濱間約十八哩の鐵道が出来た。當時は汽車を陸蒸汽とも云ひ、石炭を五平太とも呼んだもので、東京、横濱間には陸蒸汽が五平太を燃やして走りだしたと、日本の誇りの一つに數へたものと云ふことである。自分等も幼年時代には陸蒸汽、五平太と云ふ言葉を屢々耳にした

のである。然るに今や既に一萬一千哩を突破し、大正十年十月十四日に鐵道省は鐵道創設五十年記念の祝典を舉行したのである。其の際に開かれた汽車の展覽會で、日本最初の機關車と、當時東京、下關間を走る特急列車の機關車とを見比べて、其の進歩に驚いたことであつたが、客車の設備を見ても非常な相違である。聞けば明治五年頃の汽車には便所の設備がなかつた爲に、京濱間約一時間ばかりの間で、辛抱が出来兼ね、乗客中には車内の隅の方に失敬して、五圓の罰金を取られた者が少くなかつたさうである。自分等の青年時代に於ても、支線の汽車には便所の無い車が幾つもあったから、汽車が停車場に着くと、驛長に「便所に行く間がありますか」と聞質して駈出したものである。今でもそう云ふ客車を使つて居る線路が多少あるが、主要な幹線に使はれて居る客車には毎車便所のあるのは勿論のこと、列車によつては食堂車、

寢臺車、展望車までついて居るのであるから、少しも不自由はなく、随つて昔は「旅は憂いものつらいもの」と曰つたものだが、今日は旅行が愉快なものに數へられる様になつて來たのである。斯様に考へ來ると、我が鐵道の發達も亦隆々たる國運の一端を示すものとなつて、我が國家の爲に其の發達を賀する情も浮んで來るのである。

それ故に地方誌の教へ放しでなく、概論を設けて、或は産業上から、或は交通上から、或は政治、軍備、教育、貿易、通信等各種の方面から、再び日本全體を眺めて、地方誌で授けた事柄を系統的に纏めながら國勢の大要を窺はせる材料とし、尙其の智識が、他日外國地理に移つて、諸外國の狀況を知る際の比較對照の材料にもなる様にしなければならぬと云ふ聲が高まつたのである。

其の爲か、どうかは判然しないが、明治四十三年に發行せられた尋常

六年用の地理書即ち尋常小學地理卷二兒童用の最後に、帝國地理概説の章が設けられ、位置、地勢、産業、交通、政治、教育、軍備に關する簡単な記事が載せられた。所が其の記事が如何にも簡結で、申譯に書き添へたものゝ様にしか見えない爲に、其の點ではまだ實際家の満足を得なかつた。併し兎に角新に此の章を設けたのは排列上の一進歩であると賞讃せられたのである。惜い哉其の出し場が良くない。即ち日本の地方誌の次ぎに出す可き「帝國地理概説」が地球の形狀、運動、經緯度、三帶のことや、外國地理の大略を述べた後に出してあつた。爲に此の章は地方誌の次ぎに移す可きだとの批評が起つた。

そこで大正八年に發行せられた尋常小學地理書卷二兒童用に於ては、此の章が「大日本帝國總説」と云ふ名に改まつて、地方誌の次ぎに出され、其の記事も前のものよりは多少良くなつて來た。併し地勢、産業、交

通だけでなく、政治、軍備、教育などに關する記事が必要であると思ふ。日本の政治、軍備、教育などに關する纏まつた智識が與へてないと、外國地理教授の場合に内外國を比較して、其の特徴や長所を知ることが出來難いものである。

大日本帝國總説教授上の注意 排列談からは脱線することになるが、思想の聯絡上茲で、大日本帝國總説に關する教授上の注意を述べることにする。と云ふのは、大日本帝國總説即ち日本地理の概論が、説き方如何によつて、詰まらないものにもなり、又詰まるもの、意味あるものにもなるからである。既に述べた様に日本地理の概論は、地方誌で教へた材料の中、日本全體から眺めて、國勢の概要を窺はせる材料を求め、尙後日外國地理を習ふ際に、彼我比較の材料にもしようと思ふ考のものであるから、日本の地勢を概覽して、山地が多いとか、大河、長流が無

いとか云ふ様なことは左程必要とは認めない。大體概論の項目は近代に於ける我が國の領土擴張の沿革、人口の増加、農業、林業、水産業、鑛業、工業、貿易、交通、教育、軍備、政治などでよからうと思ふ。

其の各項を教授する場合に、注意す可きことを各項に就いて述べる様々なことがあると思ふが、煩雜を避けて、此處では各項に共通の注意事項を一つ述べる。それは過去を顧みつゝ近況を眺めて我が國民の努力の結果、何事も進歩發展しつゝあることを明瞭にすると云ふ事である。併し過去と云つても極大昔の状態を顧みる譯ではない。例へば我が領土の擴張の沿革にしても小學校では明治以前の所は必要はない。明治以後の變遷は次の様になつて居る。

明治二十七八年戰役前の面積 二四、七九四方里三六
同 後の面積 二七、一二六方里四六

同 三十七、八年戰役後の面積 二九、三三五方里三八
同 四十三年以後の面積 四三、四五八方里三八

此の外に租借地關東州(二一、八方里七五七)と委任統治の南洋諸島(凡そ百六十方里内外)を有し、尙大正四年五月二十五日調印の日支條約以來、我が國民は南滿洲に於て自由に居住往來し、各種の商工業其の他の業務に従事することを得るのみならず、東部内蒙古に於て、支那國民と合辦により、農業及び附隨工業の經營をすることが出来る様になつて居る。固より日本は他の大國に比較すれば、其の領土の大を誇ることは出来ない。併し内を顧れば、明治以後日本人の活動す可き領土が著しく廣まつて居る。して見れば之も我が國勢の一端を示す材料になり、又諸外國の面積と比較對照する材料にもなるのである。人口にしても同様に考察することが出来るが、固より面積や人口を必ずしも生徒に諸

記させるには及ばなからず。

次に他の一例として我が水産業の取扱ひをザツト述べる。日本は殆んど四面海の國で、海産物に受ける恩恵は随分多いものである。魚貝類、食鹽、海草等は日常食膳に上る外、肥料に供せられるものもあり、尙海外に輸出もせられて居る。其の漁獲高の統計に表はれる數字は實際の數量よりも少く、極正確なことは分らないと云ふことであるが、農商務省などでは、我が國が近來海産物によつて得る年々の總金高を凡そ二億圓内外と見積れば大過はあるまいと言はれて居る。之を二十年前の明治三十七年の漁獲總高四千五百餘萬圓に比べると、四倍以上の増加である。それも其の筈で、最近二十年間に我が國の漁業は長足の進歩をしたのである。舊來の漁船は大抵石油發動機船に變り、以前にはなかつたトロール船が勢力を揮ふ様になり、漁具も進み、漁法も進

歩した。又近來は沖と岸との間の通信には傳書鳩を使ひ、魚群偵察に飛行機を利用する様になつて居る。尙一方では大學には水産科が出来、各地には水産講習所、水産學校が設けられて、學術的に漁業が研究せられる。或は時に水産博覽會を開いて、其の發達を江湖に示す。運送法を見ても、近來は冷蔵法が進歩した爲に、新鮮な魚類を其の儘遠方に送り得ると云ふ次第で、年々歳々進歩を爲しつゝある。随つて日本は世界屈指の水産業國となり、從來世界第一の水産業國と呼ばれて居る英國と肩を並べる域に達して居るのである。斯様に考へると水産業も亦隆々たる我が國勢の一端を物語る譯になる。所が日本の漁夫の數を見ると、專業者が約百七十餘万人ある。之を英國の專業の漁夫約十萬餘人と考へ合はせると、我が漁業上尙改良の餘地あることに氣が附く。幸に日本の領海并に之に隣接する海面に於て、漁獲率の多

い漁場と認められて居る深さ百尋以下の海面が凡そ十二萬餘方里ある。歐洲に於て北は北海より南は亞弗利加のモロッコに至る間の水深百尋以下の漁場十四萬餘方里を、殆んど歐洲各國が分領して居るのに引かへて、我が國が十二萬方里を殆んど獨占する姿になつて居ることを思へば、我が國は漁場に於て地の利を得て居る譯である。尙隣國には海産物の一大需要地たる支那があることを考へあはせると、我が水産業の前途は益々有望と謂はなければならぬ。

以上の例の如く我が國の各種の産業、交通、軍備、教育、政治等の過去の状態を顧みつゝ、其の近況を説くならば、地方誌で授けた事柄の中、主要なるものゝ總括にもなり、國勢の概要を紹介することにもなり、又其の智識が外國地理を授ける際の比較材料にもなるのである。兎に角、日本地理の概論は様々の意味のある大切なものであるから、其の眞價を

發揮する様に取り扱はなければならぬ。

地球の章は外國地理の前に 尋常六年で、日本地理が終ると、簡単な外國地理や、地球の形状、運動等を授けることになつて居るが、之にも踏み可き順序がある。現行の尋常小學地理書卷二兒童用を見ると、大日本帝國總説の次に、六大洲の簡単な地理を載せ、其の次に「世界と日本」と云ふ章を設け、最後に「地球の表面」と云ふ章がある。併し予は「地球の表面」と云ふ章は、六大洲の地理の前に移すのがよいと思ふ。其の理由は簡単であるが、會得の出来ない人もあらうから、一應述べて置かなければならぬ。

尋常六年で、簡單にもせよ外國地理を授けるとすれば、經緯度に關する智識や三帶のことなどを先づ知らせて置く方が便利である。例へば英國の南端は北緯五十度であるから、全土樺太に於ける日露の界よ

りも北にあるとか、アマゾンアマゾンの河口が赤道に當り、其の流域は熱帯であるから氣候が暑いとか云ふ様に、國々の凡その位置や、氣候などを説く際に便利があるからである。どうせ同じ學年で早晚教へることではあるが、便利の多い方の順序を踏む方がよいのである。

一、高等科の地理の排列に就いて

外國地理にも概論を設けたい 今日高等一學年に授けて居る外國地理も、日本地理と同様の仕組にして、總論、諸外國誌、概論の三つから成るものにす可きだと思ふ。所で其の總論は内外全體を含む世界即ち地球の表面を大觀すればよいのであるから、既に尋常六年で授けた「地球の表面」と云ふ章が、高等一年の外國地理の總論を兼ねる譯である。再び同じ事を繰返す必要はないから、教科書通りに先づ亞細亞洲全體

を大觀した上で、其の洲内の國なり、地方なりを説く様にすればよい譯である。かくして六大洲全部の地理を説いた後に、日本地理に於ける概論として「大日本帝國總説」の章を設けたと同じ筆法で、「世界地理總説」とでも云ふ可き章を設けたいと思ふ。假りに今此の章を設けるとして、如何なる事項を説くかと云ふと、「帝國地理總説」の項目とは少しく趣が違ふ。山脈や河や、平野や都會の名稱などは、各洲及び各國の地理を説く際に教へてあるから、之を列擧する必要もなく、又産業軍備、教育なども各國誌を説く際に、比較し得るものは、内外國を比較し、つゝ教へるのであるから、わざわざ再び列べて見なくても、世界に於ける商業國は何處であるとか、軍備の充實して居るのは何國であるとか、教育機關の整頓して居るのは何國であるとか云ふことは自然に分かる。さうすると愈々「世界地理總説」の材料として説いて見たいと思ふ事項の主な

るものは、世界の人口、人種、言語、宗教、政體、外交、交通、通信などである。

かく云ふと、それ等の事項は高等二學年に於ける補習地理の教科書中、後半の人文地理の中に出て居るから、必ずしも外國地理の概論としないでも、早晚教へることになる。格別心配する必要はなからうとも考へられないではない。併し其處に大切な問題があるのである。物には前後の聯絡、關係上踏む可き順序があるから、同一の材料ならば、何時どう云ふ場合に説いても同じ價值があるとは謂はれない。成る程高等二年用の教科書は、前半が地文材料で、後半が人文材料になつて居り、前に擧げた事項は人文材料中に出て居る。けれども假りに外國地理の概論として前の事項を採用するとすれば、凡そ半學年の間、陸界學、水界學、氣界學等の初歩を説いて、地殼に變動を與へる營力、海水、海流、潮汐、波浪、風、雨など、地誌とは丸切り考察の仕方の違ふ自然現象を授け、折

角習つた外國地理の記憶の薄くなつた時に、其の總括をしようとするのは、適當な順序とは言はれない。丁度門の戸を締めて歸らうとする無性な友達を呼止めて、「オイ歸るなら戸を締めて御歸り」と言つた場合に、「イヤ今は締めない。今度來た時に締める」と答へるのと同じ様な譯で、誠に戸締まりの良くない話である。

それ故、各國誌の終つた後をすぐ「世界地理總説」が承けて、世界中の人類の總數は凡そ十六億餘と謂はれて居る。十六億以上の人類は、人間としての生理的機關を皆一樣に備へて居るのであるから、時に見分けのつかない程に似寄つた顔付の者が有つても不思議とは言はれない程の大數である。然るに奇體なことには、同じ顔付の者は二人とない。併し之が人間社會の幸福である。若しも人間が鱈や鯨の様に同じ顔付のものであつたならば、同じ年輩の者は一列一體ノベツ見界なく、皆

一樣の顔付をして居る譯になるから、自分の子も他人の子も區別はない、自分の親も他人の親も差別がなくなる筈である。昔は「樹靜ならんと欲すれども風止まず、子孝ならんと欲すれども親をまさず」と言つたものだが、若しさうなると、子孝ならんと欲すれども親分らずと慨歎しなければならぬことになる。所が造化の妙で、十六億餘の人類は十六億餘通りに出來て居る。併し頭髮の縮れ工合や、頭蓋骨の形や、目色、毛色、肌膚の色などを目當てにし、言語などを參考にして、類似の人間を集めて見ると凡そ五つの人種に分れる。各人種の分布は凡そかくかくである。是等の人類の使ふ言語は幾種類にも分れるが、世界に勢力ある言語は何語と何語とである」と云ふ様に、各項を説き終つた後に、初步の地文學に移るのが至當の順序であると思ふ。

今假りに此の案を是認するとすれば、次ぎに起る問題は、高等一學年

では現に外國地理を説くだけで教授時間が満ちて仕舞ふのであるから、世界地理總説を説く時間がないと言ふことである。元來予は外國地理を意味あるものにする爲には、教科書以外に適當な材料を補はなければならぬから、高等一學年だけで完結させやうと云ふのは無理であると思ふ。出来るならば諸外國誌と世界地理總説とを含む外國地理を高等一、二學年に配當したい位に考へて居る。併し法令上地理の一斑も教へなければならぬことになつて居るから、已むを得ず高等一學年では諸外國誌を教へるに止め、高等二學年の初に世界地理總説を説き、残りの時間を地文の教授に充てたいと思ふ。

高等二學年の地理材料 世界地理總説を設けるとすれば、今の所高等二學年の初に課するより外はないと前に述べたが、是には凡そ一學期を費せばよからうと思ふ。随つて残る二學期間に地文を配當す

ることになる。其の地文を大體どんなものにするかと云ふ問題が起る。さうすると前章に述べた理科との關係を解決しなければならぬ譯になる。

今、暫く理科には全く關係なく、小學校に於ける地文はどうある可きものかを先づ説くことにする。小學校の地文は單に地文現象を説くに止めず、之に直接關係ある人文材料に説き及ぼす可きものと思ふ。例へば地球の自轉を説けば、之に密接の關係ある時間時間に説き及ぼして、我が國の標準時の定め方も、時を報ずる方法も授ける。又一日を午前、午後に分け、晝間に於ける其の界を正午と呼ぶ所も説く。尙現今二十四時法を用ふる國のあることも、其の國の時計の盤の目の盛り方も授ける。或は公轉を教へたならば、之に密接の關係ある曆曆に話を進めて、我が國の曆の原稿は何處で作るか、何處でそれを印刷して發行す

るかも教へ、本暦や略暦を示して、其の見方も一應説いて置きたい。或は火山を説けば其の構造や爆裂、噴火や分布などを説くだけでなく、火山に關係ある人文材料をも説き、地震を説けば其の種類や、強弱などだけの説明に止めずして、地震に關する人文方面の材料をも述べると云ふ様に、温泉も雨も風も、海も海流も波も其の他の材料も、常に自然と人文兩方面を説くことにしたいと思ふ。

そこで理科との關係を述べるが、同じ地文を地理でも理科でも教授すると云ふ兩屬の場合には、豫め凡その分野を定めて、どちらも教へ甲斐のあるものとしなければならぬ。兒童の側から見ればどちらも聞きごたへのあるものにしてないと、一方の教授には價值があるが、一方は甚だ詰まらない事ばかりを教へられることになる。其の配當は公平な頭腦の當局者が兩科を見比べて匙加減をしなければならぬ。

さうでないといふ所謂我田引水で我が田に多く水を引かうとする水喧嘩が始まる。是に對する予の考を述べても、理科と折衝を経た上での説でなければ、參考にはならない。口を結んで居る可き筈のものであるから、是に就いては何も言はない。

若し或機會に地文の兩屬を廢して、地理に專屬させると云ふことになるならば、固より之を甘受して前に述べた様に、地文現象と之に直接の關係ある人文材料を説けばよい譯である。若し理科に專屬させることになるならば、去るものは追はずで、地理の方は外國地理と其の概論とを高等一、二兩學年に配當すればよい譯になる。

高等三學年の補習地理 往年土地の事情によつて高等三學年を置くことを得ると云ふ意味の法令が出來、其の地理科として補習地理を課すると定められた。當時大急ぎで編纂せられた高等三學年用の

地理教科書は其の教授に當る實際家が持て餘したもので、甚だ不評判であつた。爲に其の後修正が加へられて出たのが、現行のもので、大體日本の産業地理を課することになつて居る。之も亦教授者並に生徒が困り抜いて居るもので、何とか改良しなければならぬと云ふ聲の頗る高いものである。人文地理上から見れば、産業の教授は大切なことに相違ないから、餘程尊重しなければならぬが、地誌教授の場合及び我が國勢の大要を窺はせる場合に、其の一項目として、意味ある取扱をして置けば、さう何遍も繰返して、児童が欠伸を以て迎へる様になくしてよいのである。元來産物と産地と産額とを並べた産業地理を一年間も習ふと云ふことであると、特に其の方面に興味を持つて居る人は格別であるが、さもなければ児童ばかりではなく、大人といへども欠伸を以て迎へるのは至當のことである。

そこで自分は、高等三學年の補習地理材料として、日本の政治地理を課する方がよいと思つて居る。往年大急ぎで始めて高等三學年用の地理教科書の編纂せられる際に、意見を徴せられた時にも、同様の意見を以て答へたのであるが、色々の事情から採用にはならなかつた。一體、高等三學年の教育を受ける児童の中には、更に師範學校に入學するとか、他の實業學校に向ふ者も多少はある。併し過半は同、學年卒業の後には、もう學校教育を受けなくて、實際の社會生活に入るのである。さうすると、高等三學年在學中に一般國民として心得て置く可き大切な政治地理的事項が少くないと思はれる。尤も我が政治地理材料の或ものは、既に習つた地理、或は修身、國語の讀方讀本などで教へられて居るから、それ等の材料と重複しない様に材料を撰擇しなければならぬ。例へば既に児童は我が國の面積を知つて居り、又普天の地率土

の濱王土に非ざるはなしとの思想も持つては居るが、領土が統治者、人民と共に國家の三大要素の一つであると云ふことも知らず、又土地直接の所有者の上から見た御料地、官有地、民有地、私有地と云ふ様な別は明瞭に心得てはゐない。或は陸を離れて海を見れば、領海と公海との區別あることも知らない。

或は我が國の天皇が無上に尊嚴な高貴な御方であることは、夙に心得て居るが、憲法上如何なる權力を握つておいで遊ばすかは明瞭に知らない。帝室の諸機關も承知してゐない。或は皇位の繼承とか、皇族の方が巨籍に御下りになるとか云ふ様なことについても一向知らないのである。

又日本の人口は既に習つてゐても、其の増率、密度、海外に於ける分布も知らず、又種族上から見て、如何なる民族より、成立つて居るかも、民族

相互の融和同化の、近況も知らない。尙族制上から眺めた階級も特權も知らず、位勳の榮典などに就いても一向不案内である。

或は立法、行政の機關は既に心得て居るが、議會の權限、立法順序、停會、解散などの明確な智識はなく、又官吏の種類、階級なども授けられてはない。

又我が國の條約國が澤山あることは知つてゐても、條約締結の順序も、外政機關も知らず、海外渡航の手續も知らないのである。

大藏省が我が國の財政を掌つて居ることは知つてゐても、造幣に關することも知らず、煙草や食鹽などが專賣品であることは承知してゐるが、專賣制度に關しては一向知らない。

此の外司法機關、警察制度、などの説く可きものがあり。或は内閣や各省に附屬する印刷局、馬政局、神宮司廳、神部署、税關、各種試験場など諸

機關の事業に就いても知らせて置きたいものが少くないと思ふ。

以上挙げた例の中には、地理以外の教科に於て高等二學年までに授けた材料と重複するものがあるかも知れない。若し有るならば、他の教科に精通してゐない予の落度であるから、遠慮なく省略すればよい譯である。要は日本の政治地理材料の中、既に授けたものと重複にならない材料を先づ見定め、更に其の中から高等三學年に對して適當と見る可き材料を採用したいと云ふのである。かうして行けば、わざわざ公民科などと云ふものを小學校に設けようとしなくてもよい譯にもなる。若し公民科が新に設けられるならば、其の時には、此の學年に授く可き適當な他の地理材料を考へればよいと思ふ。

第五章 古今の對照

一、溫故知新は地理にも必要

安來町の近況 溫古知新は何事にも必要なこと。之を地理上から見ても、非常に意味のあることである。既に本書第三章中に於て、角倉了以や薩摩義士の例を舉げて、古人の事業が現代の社會に餘澤を遺して居ることを述べ、又第四章に於ては、大日本帝國總説教授上の注意事項として、過去を顧みつゝ、近況を眺めることの必要を述べた。之は一方から見ると溫故知新の一つの場合と考へても差支はないのである。

然るに故を溫ねて新しきを知り、以て古今を對照することは、單に、大

日本帝國總説教授上の注意事項たるに止まらず、内外國の地誌を説く際にも、地文現象を述べる際にも必要なことであるから、茲に一章を設けて稍詳細に述べることにする。

近來、日本全國に流行して居る俗謠安來節の本場は、島根縣能義郡の安來町である。予の郷里は但馬であるから、幼少の時から似て非なる安來節を屢々耳にしてゐたが、足、を同町に入れたのは、明治四十四年が最初で、中國地方巡講の時であつた。一體、安來町は雲伯二州の山間に産する砂鐵を原料にして拵へる鋼鐵の積出し港として、頻に大阪の商人が入込んだ處で、船の出入も多く、一時鋼鐵の爲に繁昌した處である。然るに其の後洋鐵の輸入が盛になつた爲に、其の壓迫を受けて製鋼事業も衰へ、同町に於ける鋼鐵の賣買も行はれなくなつた所から、予が始めて同町に行つた時には、全町見る影もない程に衰微してゐたのであ

る。随つて地理上何等紹介す可きものは無く、名物の安來節までが貧弱に響く様に思はれた。

然るに、其の後八年を経て、大正八年の夏九州、中國巡講の際、再び同町に客となつて數日滞在した。所が町は以前に變はる好景氣で、停車場の脇には人目を惹く程大きな安來製鋼所と云ふ工場が出来てゐて、盛に鋼鐵を製造して居り、其の分工場が松江市にも出来てゐた。又乾餹餛の製造家が幾軒もあつて、舊來の手打法による乾餹屋もあり、又米國から輸入した器械で製造して居る家もあつて、町の一名産に數へられる様になつて居る。尙又精米所が澤山出来てゐて、島根縣から縣外に出す白米は、殆んど同町一手で精げて居る。其の上可なり大きな製材所もあつて、盛に製材業を營んで居ると云ふ次第であつた。予は一々それ等の工場を視察して、活氣に満ちた營業状態を目撃し、僅か八年

の間に安來が同縣屈指の工業地に化したのに驚いた。之は畢竟町内の有力者が同町繁榮の策を講じて、新たに發展の道を開いた爲で、實に慶賀の念を禁じ得なかつた。嘗て貧弱に聞えた安來節も、既に其の頃は全國各地に巡廻興行を始めてゐた時で、俗謠界の一勢力になつてゐた。郡の有志者が予に家元の安來節を聽かせようと、頻に奔走せられたが、丁度其の時は家元が地方に巡業して居る時で、安來にはゐなかつたから、之を拜聽することが出来なかつた。

本眞靦な博覽會 大正七年夏、札幌で北海道開拓五十年記念博覽會が開かれた。予は有珠郡伊達村に出講の序を以て、之を見物することにした。青森驛に下車するまでは、唯普通の博覽會であらうと想像してゐた。所で同驛に下車して見ると、北海道廳から派遣せられて居る案内掛が待受けて居つて、御案内狀を差上げた御方はこちらへと言

ひながら待合室に案内をして呉れる。聯絡船の出帆時刻が近づくと復同じ案内者が本船に案内して、函館まで送つて呉れる。函館に着いて見ると、其處にも案内掛が待つてゐて、何かと世話をやいて呉れる。其れ等の様子を見て、予は、札幌の博覽會は五十年間に於ける北海道の發達を賀すると同時に、其の成績を廣く世に紹介しようとする眞剣なもので、東京あたりで折々景氣づけに開かれる勸工場的の博覽會でもなく、又御祭り騒ぎ的の博覽會でもないぞと推察せざるを得なくなつた。汽車の中で新聞を見ると、札幌には非常な人出。八疊の間に十二人も詰込む宿屋があると云ふので、博覽會の協賛會に向つて苦情が持込まれるが、何とも致方が無いと云ふ様な記事が出て居る。「此の模様では札幌には宿は取られない」と思ひながら森驛に下車し、汽船で内浦灣を横ぎり、伊達村に上陸した。

かくて同地の講演終了後室蘭に出て、途中見學しながら室蘭線によつて岩見澤に下車し、此處に宿を取つて置いて、札幌の博覽會見物に出懸けた。札幌驛に下車して見ると、嘗て大正四年此の地に客となつた時には馬鐵であつたものが、電車に變つて居る。其れに乗つて會場に行つて見ると、成程大變な人出。身動きの出来ない様な所も少くはなかつた。

觀覽者の多數は北海道の在住者らしかつたが、其の中には五十年前前から親しく本道の開拓に従事した老人連中が、子や孫に擁せられて見物して居る。若い人達は人目を惹く呉服屋の陳列や飾人形などに目を奪はれて居るが、老人連中は、開拓の順序を示す寫眞の陳列室に入ると、懐舊の情に打たれた様な面持で寫眞を打眺めながら、中には嬉し涙を拭ちて居る人もあつた。予も其の寫眞に興味を持つて之を眺

めながら、老人連中と話を交へたが、成る程容易に動かない筈である。密林中に繩張りをして居る所だの、樹木を伐拂ひつゝある所だの、或は蒼麥畑の整理とか、大きな樹木の切株を焼いて居る有様などの寫眞が順序よく陳列せられて居るから、嘗て老人連中が自ら開墾に従事した時の状態が、ソックリ其の儘目前に展開して居る譯である。往時を追懐するのに最も適切な材料が陳列されて居るのであるから、容易に此の室を去らないのも尤もであり、又是等の人々の開拓五十年の努力によつて今日の北海道を築き上げたのだと思へば、嬉し涙が浮ぶのも道理であると思はれた。

漸く各館を巡覽した後、演藝館にも這入つて見た。此處も滿員の盛況。晝は札幌藝人の踊があり、夜は天華一座の奇術、曲藝などの興行があつた。晝の踊の長唄は特に此の博覽會の爲に作つた新曲ばかり。

一つは山岸荷葉氏の作紅燕情話(義經蝦夷譚)之は芝居がかつた踊であつたが、他の一つは菅沼文學士作の寄三北洲風(よせてみよさたけくまどり)と云ふ三幕物。純粹の踊であつた。兩曲共に節附は杵屋勝太郎、鳴物は望月太左衛門、振附は若柳吉藏の指導を仰いだものであり、指導者らしい人が自ら後見役を勤めて柏子木叩きをして居るのであるから、舞臺も見物席も緊張し切つて居る。目の高い人が見れば、踊にも囃にも巧拙の批評の餘地はありもしようが、此の場合は開拓五十年間の努力を祝ふ記念の演藝であるから、演者も見物人も一生懸命、大變な人氣であつた。紅燕情話は芝居と踊の合の子の様なもので、左程の感興を起す程のものではなかつたが、寄三北洲風になつて

君王徳高くして哦々たる青巖霞をそばだて、聳えたり。功臣忠深きこと遠
々たる閑谷雲に埋みてかすかなり。蓬が島か後志の羊蹄山は雲の上、麓はる

けき眺め哉。

と唄ひ出してから

花は萬歳(ばんざい)の春の香、月は千秋の秋の光。くもらぬ鏡の宮柱、ふとしき立てばすべらぎの世々に榮えて徳高きこゝ圓山の神の庭かも。

の唄ひ納めまでは中々の上出来。目を閉ぢて長唄と鳴物だけを聴いて居ると、丸で東京の帝劇か歌舞伎座あたりで、大切の所作事を観て居る時と同じ様な心持がして、昔の蝦夷島に来て居るのだとは思はれなかつた。會場を去つて札幌の帝國製麻會社や麥酒會社の工場などを視ても、中々大きなもので、内地に於てもさう澤山は無程のものである。尙旭川に行くと、神谷傳兵衛氏が創立せられたアルコールの一大製造所がある。馬鈴薯から澱粉を取つた殘の滓を原料にして、綺麗なアルコールを澤山製造して居る。又追分にはコークス工場の大きな

ものがあり、苫小牧には東洋第一の洋紙製造所があり、室蘭には民間に於ける兵器製造所の覇者たる日本製鋼所があると云ふ次第で、汽車の沿道は實に能く開けて居る。

少し邊鄙の状態を視ようと、伊達村に滞在中、村内の紋鼈から約三里の道をのろい馬力に揺られながら、(當時伊達村には人力車が一挺も無かつた)有珠山麓の洞爺湖に向つた。其の道中馬力の上で、洞爺湖附近は定めし人烟も稀少であらうと想像してゐたのであるが、行つて見ると實に案外。東京の華族方や富豪が、湖畔に別荘を建て、避暑して居る。湖上には可なり大きな石油發動機船が闊しさうに通うて、阿麻を運送して居る。湖水の落口には今は既に完成して居るさうであるが、水力発電所を設けようとして居た。先年有珠の噴火の際に、火山灰で蔽はれた湖畔の地には豆を作つて居たが、噴火後は殊に上作で、豆成金も出

來て居ると云ふ次第。「人間至る處に青山あり」ではなくて、青山ある處に人間至る」とても言替へたい様に思ひ、僅か五十年間に能くも開けたるもの哉と驚嘆せざるを得なかつた。

斯様な次第で、予は北海道第二回の巡遊中、到る處で其の地の過去を顧みつゝ、現状を視察して、多大の興味を感じたが、特に強い印象を與へられたのは、札幌の博覽會場で、開鑿の順序を示す寫眞を見詰め、嬉し涙を浮べてゐる老人連中であつた。畢竟是等の人々の努力の結果が集まつて、北海道の今日を致して居るのであることを思ふから、老人連中の涙は過去の努力を追懐し、同時に現在の盛況を賀する貴い涙であると感じた。會場の札幌だけを顧みても、明治四年に市街の區劃を設けた時には、函館邊から募つて來た商賈二十餘戸と、其の他の移住民とを合せて、漸く二百餘戸の新部落に過ぎず、大部分は荆棘密林に蔽はれ

て、熊狸が出没徘徊する様な處であつたのである。然るに約五十年を経たる博覽會當時の戸數は一萬六千八百戸となつて、八十四倍の増加を示し、人口は八萬九千餘に達したのである。其の後大正九年十月一日に行はれた國勢調査によると、札幌の人口は十萬二千五百七十一となつて居るから、今では十一萬人を突破して居るであらう。兎に角五十餘年前まで蝦夷島と呼ばれた處、熊や狐が徘徊した土地が、今は東京同様の藝術を味ひ得る一大都會になつたのであるから、其の發展や實に驚く可きである。

つまり北海道の今日あるは、明治維新の開拓使設置時代から、銳意本道の開拓を獎勵した官廳の努力と、遙々内地から移住して、毎日／＼星を戴いて家を出て、月を仰いで歸りながら開拓の實務に當つた人々の努力と早く本道天賦の富に着眼して、多額の資本を下した資本家の力

との資である。地理で北海道を紹介する場合に、單に山川湖海、氣候、産物都會の名稱などを列擧するのみで、官廳移住者、資本家の努力に觸れないならば、誠に素直な無雜作な地理教授とは言ひ得るであらうが、丸で大杉榮の葬式の様なもので、骨が無い。人の努力の蹟を顧みない地理は、今後の國民を教育する地理科としての價値が少い。

二、古今の對照は盛衰を明示す

過去を誇るは老衰者の常　電燈のある家に生れ、瓦斯の火で水道の水を温めた湯を産湯に使つて成人した者は、電燈や瓦斯や水道を普通、當然のものとして心得て、其の有難味を知らない。之は行燈時代の生活の經驗が無いからである。宅の子供等も其の仲間であるが、大正十二年九月一日の大震、大火で、電燈も水道も瓦斯も一時に止まつて、一本の

蠟燭も大切にしなければならず、水は一々井戸のある家から貫水をしなければならず、煮炊きには炭や薪を用ひなければならぬことになつて、始めて電燈、水道、瓦斯の有難味を體驗した。長男(尋常六年生)の如きは折々響く汽車の汽笛を聞く度に、欣然として、汽車が米を運んで居るぞと曰つて喜んだものである。其の後當座の應急工事が施されて、電氣が通じ、瓦斯や水道が通じて來た時には、今更の如く其の便利を悟り、手を合はせて拜まぬばかりに感謝して居つた。

地理科で各地の状態を紹介する時にも、之と同じ様な趣のあることがある。無論全国各地の近況を叙するのが主であるが、簡単に其の過去を顧みて、近況に説き及ぶことにすると、説く可き土地なり、物なりの盛衰が明かになり、天の時、地の利、人の力など様々の事情によつて、今日ある所以を理解し、或は天與の幸福を賀し、或は人の努力の貴さを知る

ことの出来る場合が多い。

土地によつては、嘗て盛んであつた處が、様々の事情の爲に、次第に衰へて、殆んど世人の顧みない様な土地になることもある。さう云ふ處は地理書から省かれる様になり、假令省かれなくても、地理上の估券が下ることになる。例へば石川縣犀川の河口に在る金石港の如きも、嘗ては金澤市に對する外港として、相當に廣く其の名を知られた處で、金澤市を紹介する場合には、必ず附説せられた港である。併し鐵道北陸線開通後は、殆んど總ての貨客が汽車によつて、金澤に出入することになつた爲に、今日では此の港の名も知らない人が多い。小學校の地理書にも無論出してはない。

又馬や駕籠などが東海道筋の大切な交通機關で、雲助連中の羽振の良かつた時代には、五十三次は名高いもので、習字手本などにまで其の

名が出されてゐたものである。然るに鐵道東海道線が開通してから後は、或る少數の宿場は以前に勝る繁榮を示して居り、地理書にも出されて居るが、大多數の宿場は世間から忘れられてしまふ様になつて居る。何分汽車の開通後は、たゞに極物數奇な閑人つまじいが、それも多くは自轉車で、東海道を乗通して、漸く彌次、喜多氣分の香を嗅ぐとか、時に健脚家が足だめしとして、輕裝空手で走り通すと云ふ様なことはあるが、其の外には、殆んど東海道を歩き通す者が無くなつたのであるから、時勢の變遷上已むを得ない譯である。つまり東海道線開通後は、往時五十三箇處に分配せられてゐた繁榮が、名古屋、岡崎、豊橋、濱松、静岡等、數箇處に集合した形になつて居るのである。

次に、現に我が國に於ける輸出品の横綱たる生糸こゝろを考へて見るに、長崎で貿易の始められた頃には、主要輸出品は銅で、盛んに輸入せられた物は白糸しろいと即ち生糸であつた。當時我が國では、養蠶製糸の業が幼稚で、左程開けてゐなかつた爲に、葡萄牙の商船が生糸を盛に輸入したものであり、徳川家康の如きは内地の織物工場奨励の爲に、慶長八年には、長崎奉行をして京都、堺、長崎の商人に白糸の買入れを諭さしめたこともある。然るに明治以後は生糸が輸入表から姿を隠して、輸出表の第一に表はれる様になつて居る。

又、長崎港を貿易上から眺めると、開港場としては徳川時代以來の門閥で、嘗ては我が國唯一の貿易港、或は筆頭の開港場であつた時がある。勿論今も貿易港の先輩とし、日本屈指の開港場として、世の注意を惹いてゐないではないが、其の貿易額は後進の横濱、神戸、大阪、門司、名古屋等よりも遙に下位に下り、輸出に於ては第七位、輸入に於ては第八位を保つて居るに過ぎない（大正十一年）。随つて貿易に於ては零落しかけた

舊家の趣があつて、著しい誇りとはならず、却つて三菱造船所の方が長崎の誇りとして、全國に認められる様になつて居る。

斯様な次第であるから、古今の對照は土地々々の盛衰を明示するものであるが、極度に衰微すれば、地名辭典類は別として、普通一般の地理書からは除去せられるから、生徒に教へる必要がなくなり、又それ程の衰微でなくとも、他に隆々たる勢のものが表はれると、衰運に向つて居る方は、軽く取扱はれることになるから、古今の對照は主として發展しつゝあり、又隆々たる勢を示しつゝある土地や物に關する取扱の一法となる場合が多い譯である。土地でも、家でも、個人でも誇る可きものが過去にのみあつて、現在の誇りが無い様なことにはしたくない。何時でも過去に勝る誇りが現在にある様に努力したいものである。

濱松市の古今

濱松は往時五十三次の一として、廣く其の名を知

られた處であり、又可なり繁華な地として聞えた土地であつた。然るに明治四年七月十四日の廢藩置縣が先づ衰微の本となつた。同年十一月十五日濱松縣廳の所在地となつたが、明治九年八月二十一日濱松縣の廢止によつて一層衰運に向ひ、一時は火の消えた様な淋しい處になつてしまつた。然るに土地の有力家が早くも其發展策を講じ、工業地、商業地としての經營に努力したのである。其の甲斐があつて、次第に諸種の工業が起り、商業も活氣を呈して、定住者も増し、人の出入も多くなつて、明治四十四年七月一日には市制を布くことになつた。爾來市況も益々盛になり、日本第一の日本樂器會社を始め、日本形染、帝國製帽、濱松紡績大日本氷糖等、いづれも規模廣大なる工場があり、官邊のものでは專賣局の煙草製造所、鐵道省の濱松工場もあつて、立派な工業地に化してしまつた。人口は静岡市に一步を讓つて居るが、其の増加率

は濱松の方が多いのであるから、或は近く静岡市を凌駕するかも知れない。商店にしても静岡市では、商品を多く倉に藏めて店頭陳列する方は少いと云ふ慎ましやかな傾向があるが、濱松は寧ろ有りつたけの品は賑はしく店頭陳列する風があり、資本も有りつたけの金を運轉して手広く営業しようとする傾きがある。即ち静岡市は大御所(家康)の養老地となつた土地だけあつて、奥床しみが有り、健實一方の老舗の趣があるが、濱松は進んで運命を開拓せんとし、提灯や樂隊で景氣よく営業しようとする新店の様な氣分がある。

濱松に於ける大工場中、特に有名なものは日本樂器會社で、其の創立者は故山葉寅楠氏である。氏は樂器製造の素養があつた譯ではないが、工夫力に富んでゐる人であつたから、土地の小學校で使用してゐた輸入風琴の修理を頼まれた。其の際氏は風琴を解體して、修理を爲しつ

つ其の製造法を悟り、遂に明治十八年に其の製造を開始した。最初は個人經營であつたが、同二十三年合資會社組織に改め、専ら風琴を製造してゐたのである。併し同三十三年からはピアノの製造をも始め、同年株式會社に改めて今日に至つて居る。今や風琴、ピアノの外、盛にハルモニカをも製造し、内外各地に賣出して居るのである。兎に角之が日本第一の西洋樂器會社で、其の製品は全國津々浦々に行渡り、尙濠洲、印度、支那、南洋方面、南米諸國等に向つて盛に輸出せられて居る。

話が脱線して山葉氏の手柄話に立入つたが、濱松が商工業地として發展するのにつれて交通も便利になり、東海道線の外、中泉行、奥山行、二俣行(西ヶ崎、笠井間の枝線がある)の輕便鐵道がある。將來敷設する可き信遠鐵道が開通すると、市況は更に繁榮を加へるに相違ないと期待せられて居るのである。要するに一時火の消えた様に思はれる程の衰

運に陥つてゐた濱松が、主に土地の人の努力によつて、活潑々地の商工業地となり、交通上の要地になつたことを思へば、實に痛快至極である。

横濱港の古今 昔、横濱は寂寞たる一漁村であつたが、幕末の大政治家井伊大老が、責を一身に引受けて締結した安政五年六月十九日の通商條約によつて、翌年六月から開港場となつた。爾來戸口の増加に伴ふて、山を削つて海を填め、次第に街衢を廣めて、關東の大震以前には、人口四十餘萬を有する様になり、日本第六位の一大都市になつてゐた。市全體の變遷を述べると、話が長くなり過ぎるから、茲には港のみの變遷の大要を説くことにする。

安政五年の通商條約を見ると、神奈川を開港することになつてゐて、横濱を開くことにはなつてゐない。然るに實際開港したのは、神奈川ではなくて、横濱であつたのは、何人も先づ疑問を挿む點である。是は

當時の幕府が非常に苦心した末かく定めたのである。即ち神奈川は以前から東海道の一宿驛で、江戸に往來する者は、上は勅使より、下は雲助、馬方に至るまで、皆此處を通過しなければならなかつた。それ故若し此處に外國人の商館などが立並ぶと、攘夷熱の熾な時であるから、如何なる事件が起つて、面倒な外交問題を惹起すかも知れないと云ふ心配があつた。仍つて幕府は大層頭を悩ました末、往來の人目のつかない隣接の横濱を開港することにした。すると外國公使連中は之を條約違反なりとして、手厳しく抗議を申し出した。そこで幕府は、神奈川は此の地方の總名で、横濱は其の一部分の村名であるから、條約違反ではないと答へた。併し公使連中は之を牽強附會の遁辭として、容易に承認しさうにも見えなかつた。

然るに、其の實地の有様を見ると、神奈川は土地も狭く、海も淺く、逆も

廣い地面と比較的に深い海を持つて居る横濱には及ばない。爲に外國商人は皆横濱の開港を熱望して、公使の説に反對し始めた。其の上幕府は飽くまで横濱の開港説を固持して動かなかつた爲に、公使も終に其の開港を承認したのである。

さて横濱の開港後、明治二十二年までは、殆んど天然の儘の港で、見る可き設備も無かつたが、貿易事業が發達するにつれて、港の不完全を感ずることが痛切になつて來た。そこで同年始めて築港工事を起し、同二十九年迄に約二百三十五萬圓の工費を投じて、防波堤と棧橋とを造つた。併し之だけでは到底長く満足することが出來ず、明治三十二年から更に大藏省直營の築港工事を起し、工費約二百三十萬圓を投じて第一期の擴張工事を始め、同三十八年に竣工した。之によつて港の面目が大いに改まつたのであるが、此の年二月當時世界第一と稱せられ

たる巨船ミネソタが入港しようとした。其の時には大いに狼狽せざるを得なかつたのである。

ミネソタの來航に先立つて、米國の大北汽船會社から、我が郵船會社に向つて、横濱港は此の巨船を入れ得るかと問合せて來た。當時横濱の内港は最深二十七呎であつたから、噸數二萬一千噸、吃水三十三呎二吋のミネソタを入れることは出來なかつたのである。然るに其の前年以來我が國は露國と戦つて、連戦連勝、難攻不落と稱せられたる旅順をも開城せしめてから、間の無い時である。日東戰勝國第一流の港に、ミネソタを入港せしめ得ずとは、意地でも言へない。又折角遠來の珍客を迎へないのも遺憾だと云ふ譯から、郵船會社は意を決して、入港し得ると返電した。かくて晝夜兼行の大急ぎで、港の一部を浚深して、ミネソタの來るのを待受け無事に此の巨船を迎へたのである。其の浚深

費が七萬二千圓かゝつたと云ふことである。

此の頃から世界の商船が次第に大きく造られる様になつて來たから、明治三十九年には更に工費約八百十七萬圓を以て第二期の擴張工事を始め、大正六年に竣工した。御蔭で其の後は二萬二千噸の天洋丸や春洋丸などが、平氣で繫船岸壁にピッタリ横附けになる様になつた。横濱港の爲、將又帝國海運の爲に慶賀す可きである。其の後明治四十三年に至つて、港灣調査會が全國の港灣を分類して、

第一種 國家が其の經營に當る可き港灣

第二種 國家の監督助成の下に地方が直接經營す可き港灣

第三種 地方が獨力經營に當る可き港灣

とした際、横濱は第一種港（東京は第二種港）に選定せられた。かくて大正十年内務省は新に第三期擴張工事の計劃を立て、工費約千三百四十

五萬圓を以て、十箇年の繼續事業として、今の神奈川側防波堤の内面に繫船岸壁等を造ることにしたのである。

然るに、大正十二年九月一日の大震によつて、横濱も東京も未曾有の大損害を蒙り、銳意其の復興策を講じなければならぬことになつて來た。所が其の復興策の一つとして、東京、横濱を聯絡する京濱運河を開鑿す可しと云ふ案もあるが、又一方には從來東京が横濱を關門港としてゐた爲に、多年經濟上の苦痛を嘗め來つたことは明瞭であるから、此の際東京に大築港工事を施す方が、引續き横濱港に築港工事を施すよりも、我が國家永遠の良計であると云ふ説もある。此の問題がどう決着するかは今後の復興案の立て方一つで定まる譯である。

我が鐵道の古今 元來、物の進歩とか發達とか云ふことは、近況を述べるだけでは明瞭にならない。過去の狀態と現在の有様とを對照

することによつて明かにし得るものである。茲に我が國の鐵道を取つて其の一例にするが其の總延長が約一萬二千哩に達して、主要な都會は殆んど皆鐵道の便を備へて居るとか、關東近畿、九州北部の平野には、數多の線路が從横に通じて居るとか云ふ様な近況のみを申譯的に述べるのでは鐵道の發達も分らず、又交通機關の發達を賀すると云ふ様な心情も起らず、尙又國勢發展の一端を示す材料にもならない。

茲に明治以前に交通の最も頻繁であつた東海道だけを考へて見ても、江戸と京都の間百三十四里の旅行をするとすれば、徒歩でなければ、駕籠に乗るか、馬に乗るより外に便利なものはなかつた。運が悪ければ山賊や胡麻の蠅にも出會ひ、川止めにも遭ひながら、普通十數日を費したものである。其の途中には駕籠昇専門の雲助連中であつて、如何な雲助も箱根じや涙、後見返し袖しぼると唄つた箱根の難路もあり、又

「箱根八里は馬でも越すが越すに越されぬ大井川」と唄はれた運臺渡し
の面倒もあつて、決して樂なものではなかつたのである。随つて駕籠
や馬の時代には、旅は憂いもの辛いもの」と言ひ、「可愛い子には旅をさせ
な」と言つたもので、旅行が青年の一大修養法と見られたのである。

然るに今日は特急列車によれば、箱根山下りの汽車の足拍子トコト
ンネルやトコトンネルやとか、元祿の頃鐵道があつたなら早かりしぞ
と判官が言ふなどと駄句りながら、東京から僅か十一時間餘で京都に
着き得る様になつて居る。之は全く鐵道が敷設せられた御蔭である。
併し其の鐵道が我が國に於ては明治五年以前には丸切りなかつたの
である。所が明治維新の後、早くも故公爵伊藤博文、同侯爵大隈重信が
頻に鐵道敷設の必要を説き、外國から資金を借入れ、英國の鐵道技師モ
レルを聘して先づ東海道線を敷設することにした。當時民間の輿論

は鐵道には大反對で、東海道筋の宿屋や、雲助連中が職を失ふとか、金を外國から借入れるのは國辱だとか言つて反對する者が多く、政府部内にも反對者があつたのである。併し廟議は鐵道敷設を可決し、明治三年京濱間の工事に着手した。煉瓦もなければ、鐵道工夫も無い時に、職務に忠實なモレルの指揮の下に京濱兩方面から工事を起したのである。その工事の監督指導の任に當つて、着々工事を進める様に取斗つた人が、日本に於ける鐵道の開祖元勳として有名な故子爵井上勝である。此の人は長州萩の人で、文久三年伊藤博文、井上馨などと共に英國に渡り、鑛山や鐵道に關する研究を積み、明治元年十二月に歸朝した。木戸孝允に見込まれて、明治四年鑛山頭兼鐵道頭に任ぜられ、後には鐵道頭專任となり、其の後力を専ら我が鐵道事業に盡し、明治四十三年八月二日英國に滞在中倫敦で客死した。今東京驛降車口の側に其の銅

像が立つて居る。

餘談はさて置き、京濱間の鐵道は明治五年に落成し、同年九月十二日明治天皇が親しく東京（當時の新橋驛、即ち今の汐留驛）横濱（今の櫻木町驛）に御臨幸の上、本邦最初の鐵道約十八哩の開通式を御舉げになり、其の翌日から一般公衆の乗用に供した。此の開通式の前、横濱では權令大江卓が各町に對して、餘り多くの費用をかけずに奉祝の意を表する方法を考案させることにした。そこで戸長連中が相談の上、外國人が祝祭日に國旗を立てるのに倣つて、我が國旗と日の丸の提灯を各軒頭に飾る案を縣廳に差出した。是は名案だと云ふ譯で、全市に通達し、式の當日之を實行して見ると、大層景氣がよくて評判がよかつた。我が國で祝祭日などに國旗や提灯を軒頭に掲げる様になつた本は、横濱で、京濱間の鐵道の開通式の時が最初であると云ふことである。其の後神

戸大阪間の鐵道が開通し(明治七年)、大阪、京都間も開通し(明治九年)、次第に延長せられて、東海道本線が全通したのは明治二十二年七月一日である。其の間に私設鐵道の敷設も許されたから、各地に鐵道が敷設せられることになつた。然るに土地によつては、鐵道が通り、停車場が設けられると、其の土地の繁榮を滅殺するものと誤解して、様々の理由をつけ、色々と運動して、成る可く自分の土地から離れた處に鐵道を敷かせ停車場を置かせようとして、其の目的を達したが、後になつて後悔した處も随分澤山ある。兵庫縣の御影、岐阜縣の笠松、愛知縣の岡崎などは其の適例であらう。併し鐵道の便利なことが分つて後には、輕便鐵道を設けて本線に聯絡をつけるとか、電車線路を敷設して不便を除くとか云ふ様になり、遂には新に鐵道が敷かれることになる、自分の土地に停車場を置かせやうと激烈な運動を試みる様になつて來た。變

れば變るものである。

斯様な次第で、我が國の鐵道の總延長は今や約一萬二千哩に達した。列車の設備も非常な變化で、前にも述べた通り、京濱間に最初運轉した汽車には便所がなかつた爲に、辛抱し兼ねて車内を汚し、五圓宛の罰金を取られた人も少くなかつたのである。今日でも極邊鄙な短距離の鐵道や、貧弱な私設鐵道には便所の無い汽車が走つて居る所が無いでもないが、國有鐵道の長距離の線路を走る汽車には便所は勿論貸枕もあり、洗面所も喫烟室もあり、食堂車、寢臺車、展望車もあるのであるから、旅は憂いもの所か楽しいものとなつて來た。嘗て著者の父は「やすやすと汽車に引かれて善光寺旅をうし」とは思はざりけり」と詠んだことがある。機關車の古今を對照して見ても、非常な進歩である。大正十年十月十四日我が鐵道開通五十年の記念式が東京驛で舉行せられた

時、鐵道に關する様々の品が陳列せられ、當時九州の島原鐵道や濱松の鐵工所で使用せられてゐた日本最初の機關車（京濱間に用ひたもの）も、東京、下關間の特急列車用の機關車も陳列せられてゐた。機關車類に就いて少しも専門的智識の無い吾々も、此の兩機關車の外形を見比べただけで、其の進歩の著しいのに驚いた譯である。

此の外、車内の燈火、溫度調節の設備、鐵道役員の服裝等の變遷などから、手荷物、貨物の運送、郵便物の遞送、線路敷設、隧道の掘鑿法、車輛製造等の技術などに至るまでの古今を調べると、様々な變化があるが、餘り話が長くなるから、此の邊で止めて置かう。

パナマ運河の古今　　パナマ運河の開鑿は世界の交通史上に特筆す可き大事業である。此の運河が愈々開通したのは大正三年のことであるが、人の着眼は時の古今によつて、さう大した相違のない場合が

あるもので、**パナマ地峽に運河を開鑿しよう**と云ふ考は、**コロンブス**（西曆一四三〇—一五〇六）の新世界發見後間もなく浮んだものである。茲に其の起原を述べるに當つて、先づ述べて置きたいのは、**バルボア**（西曆一四五七—一五〇七）である。此の人は西班牙の探檢家であるが、亞米利加印度人から、南米の**ペルー**に多く黄金を産することを聞き、遠征隊を組織して**ペルー**に向ふ途中**パナマ地峽**を横斷し、波靜なる太平洋を發見して南下目的地に達した。之が**パナマ地峽**最初の横斷者で、西曆千五百十三年（後柏原天皇の永正十年）のことである。今**パナマ運河**太平洋岸の起點たる**バルボア**と云ふ地名は、此の人の名に因んだものである。

さて、**バルボア**が組織した遠征隊中に**サーペドラ**と云ふ者があつた。之が**パナマ運河**開鑿の議を唱へた最初の人で、西曆千五百十七年（永正十四年）以來頻りに其の研究を爲し、時の西班牙王**チャールス五世**（西曆

一五五六)に其の策を献じようと思つてゐたが、其の志を達せずして、同千五百二十九年(後奈良天皇の享祿二年)に歿した。所でチャールズ五世もパナマ運河の開鑿を思ひ立ち、總督に命じて其の調査をさせたが、不可能の難工事であるとの報告もあり、又當時神が續けて居る兩大陸の縁を絶つのは神意に背くと言ふ様な輿論も高かつた爲に、之を斷念したのである。

かく識者は夙にパナマ地峽の開鑿に目を着けたが、始めて其の工事に手を着けたのは、佛人レセツプス(西曆一八八〇年)である。レセツプスは西曆千八百六十九年(明治二年)スエズ運河を開通せしめた人であるが、同千八百七十九年(明治十二年)パナマ運河開鑿の爲に、萬國大洋運河會社を組織し、翌年(同十三年)其の工事を起した。當時の設計はスエズ運河と同じく水平式であつたが、スエズが殆んど平坦な砂地であるのに

引きかへて、パナマ地峽にはクレブラ、クエブランチャの兩山脈が連續してゐて、工事が非常に困難である。其の上氣候の良くない不健康地である所から、人夫が熱病に罹つて死んで仕舞ふ。世界中で最も頑健と認められて居る支那の苦力を使つて見たが、それでも矢張り同様であつた。爲に豫定工事の約五分の二を掘つただけで、此の會社は破産した。之は同千八百八十八年(明治二十一年)十二月十四日のことである。其の後、同千八百九十四年(明治二十七年)佛蘭西に再び新な運河會社が起つて、復開鑿工事を起したが、其の進行は極めて遅々たるものであつた。

其の頃に至るまで、亞米利加合衆國は、専ら目をニカラグ、線に注ぎ、同運河開鑿の下心を持つてゐたが、彼の米西戰爭(明治三十一年)の當時、軍艦オレゴン號をサンフランシスコから大西洋に廻航せしめる場合

に、南米のマゼラン海峡を迂廻せしめるより外に道はなく、之が爲に多数の日子を要した所から、米國では太平、大西兩洋を聯絡する運河の必要を痛切に感じたのである。そこで同戦争後、米國に於ては運河熱が高まり、段々調査した結果、ニカラグラ線よりもバナマの有利なることを悟つた。然るに當時バナマは南米コロンビヤの領地であつたから、米國は先づ同千九百〇三年（明治三十六年）十一月三日バナマ州をして其の母國から分離して、獨立の共和國たらしめた。かくて同月十八日バナマ共和國と運河條約を締結した。此の條約によつて米國はバナマ運河の開鑿權を得、尙運河の兩側五哩の土地は、之を運河地帯と稱して、永久米國の支配を受く可き土地とし（コロン、バナマ兩市を除く）其の報酬として、米國は一千萬弗（約二千萬圓）をバナマ共和國に與へ、尙該條約批准の九年後より、毎年二十五萬弗（約五十萬圓）を支拂ふこととし、翌年

（明治三十七年）二月二十三日其の條約を批准した。是より先、佛國の運河會社から米國に對して會社の特權、資産の賣渡しを申込んでゐたから、同年米國は四千萬弗（約八千萬圓）で之を買收し、愈々バナマ運河開鑿の設計を立てることにした。

運河條約批准の後、米國では特別委員を設けて工事の大方針を定めさせた。最初多數の委員は、運河の水面を海面と同高ならしめる水平式を可としたが、段々調査を進めて見ると、水平式を採用することになれば莫大の費用がかゝり、又長年月を要することを知り得た爲に、遂に階段的に開鑿する閘門式を採用することに改め、同千九百〇六年（明治三十九年）六月二十九日米國議會は閘門式を可決した。そこで運河工事に關する部署を定めて、建築及び技術部、法律部、糧餉部、民政部、衛生部、支拂部、検査及び計算部の七部とし、其の上に米國大統領に直屬する委

員長を設けて、全部を監督させることにした。併し工事の着手に先立つて、色々の準備作業を施さなければならなかつたのである。其の中最も重大な作業は衛生に關する設備で、之には米國が極力施設を加へたものである。

元來、パナマ地方は暑氣が強く、又毎年五月から十二月までの雨季には雨量が多く、河水が氾濫する爲に、河畔に卑濕の沼澤が多い。随つてマラリヤ、黄熱病などが流行する不健康地である。殊に運河地帯はチャグレス、リオグランド兩河に沿ふて居る爲に、其の害が特に甚しかつた。従來の運河會社が成功しなかつたのは、主として其の爲であつた。仍つて米國は衛生状態の改善を、最も大切な準備作業と心得、先づ全力を此の點に注いだのである。即ち運河地帯に於ける都邑村落の上水、下水の設備を完全にし、マラリヤ病毒の媒介者たる蚊を撲滅する爲に、

池、沼などには殺蚊劑を投入し、或は溝を掘つて河水の漲溢を防ぎ、住宅地には清潔法を實施し、市街の道路は全部敷石にし、地盤の低い處は地上げを爲し、尙役員、人夫などの住宅は特に床を高くし、四方を開放して風通しを良くし、又蚊の襲來を防ぐ爲に編目の細かな鐵網を張ると云ふ様に、盡し得るだけの設備を施し、其の上要處々に病院や檢疫所を設けて、病根撲滅の策を講じたのである。其の甲斐あつて同千九百〇八年（明治四十一年）に至つて、熱病は殆んど全く其の跡を斷ち、舊來の不健康地が全く化して健康地になつた。人の努力は實に貴いものである。かく一方に於て衛生的施設を爲すと共に、他方では全區域を太平洋區、中央區、大西洋區の三區に分けて開墾工事に着手した。

パナマ運河はカリブ海方面のリモン灣から太平洋岸のパナマ灣に達するもので、其の全長が凡そ二十里餘（五十哩四分）ある。其の内陸上

の開鑿區域の長さは十六里餘(四十哩半)で、其の間にガツン、ペドロミグエル、ミラフロレスの三箇處に閘門が設けてある。リモン灣内の起點からガツンの閘門まで三里餘(七哩七分)の水面は海面と同高で、深さが凡そ四十一尺、幅が約五百尺ある。併し其の内ガツン附近には船待ちの便を圖る爲に、幅凡そ千尺の處がある。ガツンとペドロミグエルとの間十三里餘(三十二哩)の水面は海拔約八十五尺、深さ約四十五尺乃至七十七尺で、運河の幅は約三百尺乃至千尺であるが、貯水後は運河の沿岸地も一面の水界となり、形の極めて不規則な面積凡そ二十七方里(百六十四方哩)の湖水になつて居る譯である。ペドロミグエル、ミラフロレス間の長さは一里未滿(二哩)。ミラフロレスからバナマ灣内に於ける運河の終點に至る間の延長四里餘(十一哩)の水面は海水面と同高である。

さて、最初運河の開通期は同千九百十五年(大正四年)一月一日の豫定であつたが、工事が意外に早く捗取り、同千九百十三年(大正二年)十月十日に掘削工事も三箇所の閘門も完成した。そこで工事中ガツン湖の水を堰止めてゐたガンボアの堤防を破つて、水を全運河に通じたのであるが、其の際堤防破壊に用ひたダイナマイトは、海陸長距離の電線を連絡して、米國ワシントンの大統領官邸内に装置した電氣鉗に接続せしめ、大統領が手づから之を押して發火せしめたのである。流石に米國の仕事だけあつて、發火法までが奇抜である。

其の後、諸般の設備を完成し、西曆千九百十四年(大正三年)八月十五日を以て、愈々バナマ運河は開通し、吃水三十尺以下の各國船艦が平等の條件の下に、此の運河を通航し得ることゝなつた。當日米國陸軍省所屬の汽船アンコン號(一萬噸)は午前七時リモン灣を發して運河を通過

し、九時間の後、即ち午後四時にパナマ灣に出た。日本の汽船中此の運河を通過した最初の船は日本郵船會社の徳島丸で、同年十二月九日であつた。

それは兎に角、パナマ運河の開鑿事業は、最初之を目論だサーベドラが歿してから三百八十五年の後に、米國の手によつて、其の遺志が達せられた譯である。此の運河の開通が、世界の交通上に與へる便益の大なることは、何人も承知のことであるから、運河話は之で擱筆する。



第六章 土地の誇り

一、土地の誇りは大別二通り

自然的の誇りと人文上の誇り

土地によつては特に誇りとす可きものゝない平凡な處もあるが、處によつては、大小の別こそあれ、他に對して誇る可きものを持つて居る土地もある。小なる誇りも之を大にして吹聴したがるのが一般の人情であるから、遠慮なく處最負、御國自慢の本音を吐かせると、大小様々の誇りがさらけ出されるのが常である。之を地理學上から見れば、無論玉石混淆を免れないが、土地の誇りを列舉して、自らを慰め、又之を世間に吹聴して、満足を求める傾向は大抵の處に認められる。予が一種の通俗文學として集めて居る全國

各地に於ける處自慢の俚謠を見ると、土地の誇りに對する人の心理の一端を窺ふことが出来る。先づ其の一二を舉げて見よう。

○白河名所

白河名所は何じやいな から風茶葉に馬の市
關の名所や小峯城 南湖公園羅漢山

○和歌山名所

和歌の名所で言はうなら 和歌山城内岡公園
日本で名高い和歌の浦 繁華な市中を後にして
電車に乗れば一走り 根上り松はあをくくと
降りた所は和歌浦の良い港、一に横現二に玉津島
三に下り松四に鹽竈よ

第六章 ○讚岐名所

讚岐名所は栗林公園

八栗屋島に壇の浦

津田の松原向ふ見渡しや 引田の浦には網をひく
朝は瀬居島宇多津沖 坂出鹽濱飯野山
鞘橋又と類なき日本一社の 象頭山高燈籠

○福岡名所

福岡名所で見せたいものは 九州大學潮湯晴心館
敵國降伏宮崎八幡 元寇記念碑日蓮銅像
荒津山から沖を眺めりや 玄海志賀や殘島
開けたねく 博多鐵道西戸の大築港
外に無いぞへ千代の松原 しよんがいな

○滿蒙宣傳

滿洲の沃野千里の汽車の旅、豊に稔る黍と豆、
煙漲る製鐵所、撫順の又、石炭露天堀。
鄭家屯西に向へば、バインタラ、牛や羊の群遊ぶ、
沃野千里の草の原、今は又、開けて汽車の旅。

滿洲の春は熊岳梨の花、夏の眺めは星ヶ浦、

秋は千山紅葉狩、冬は又、安奉線の雪景色。

胡沙吹くと、誰が傳へけん滿洲も、平和の女神に抱かれて、花も笑へば鳥もな
く、そして又、文化の實を結ぶ。

白雪の積る平野に月冴えて見渡す富源幾千里、日滿蒙の親善に、やがて又、文
化の花盛り。

滿蒙の沃野開けて幾千里、大和丈夫の活舞臺、月の沙漠のはてまでも、文化の
又、花を咲かせたい。

唐大和源遠き交りの末は互に白頭山、たまの口説は鴨綠江の水に又、流して
暮したい。

妹と脊の堅く繋ぎし鐵橋は、深き心の鴨綠江や、切れて見せるは表向き、契は
又、變らぬ國と邦。

滿蒙宣傳の鴨綠江節は、流石に大連の滿蒙文化協會が近年選んだもの
だけあつて、文句が整ふて居る。無論在來の俚謠の文句の大多數は、文

學として練上げたものでもなく、地理學上から材料を撰擇した譯でも
ないから、之を文學や地理の上から眺めて、彼之の詮議立ては無用であ
るが、若し將來新に作る場合には、宗匠が見ても、地理學者が聞いても、非
難の少いものにしたものである。前に掲げた滿蒙宣傳の文句の如
きは、單に位置、地勢、氣候、産物等を列擧さへすれば地理の様に心得て居
る人よりは、氣の利いた所に目を着けたもので、見識ある活地理學者が
數千言を費す講演の結論たる日鮮融和、日支兩國共存共榮の必要及び
滿蒙開發に對する邦人從來の努力、並に將來の覺悟を、誠に簡結に示し
たものである。

さて、前に掲げた俚謠中にも表はれて居る通り、土地の誇りは、大別し
て自然に備はる天與の誇りと、人爲的施設による人文上の誇りと、の二
種になる。前者を自然的の誇りとし、後者を人文上の誇りと名づけて、

内外各地の誇りを考へて見ることにしよう。

一、自然的の誇り

自然は誇らず人が誇る　桃李もの言はず、花語らず、如何に偉大な誇りを備へてゐても、自然は其れを誇りもしなければ、自慢もしない。其處に自然の偉大、森嚴の一端が表はれて居る。自慢もせず、謙遜もせず、唯其の儘平氣に存在して居る自然を、人間と云ふ立場から眺めて、各國各地の誇りとするのであるから、誇るものは自然自身ではなくて、人間である。併し其の誇りが殆んど天然自然其の儘で、人の努力や施設の加はらないものを自然的の誇りと呼ぶのである。富士の秀峯も琵琶の大湖も、松島、橋立の風景も、鳴門海峡の渦も、若和布も、伯州三朝のラヂューム泉も、豆州熱海の間歇泉も、關東平野も、利根川も、沼津の氣候も

高田の雪も、大牟田の石炭も、阿里山の檜も皆是れ自然的の誇りの一つである。

更に其の例を海外に求めると、規模の廣大な誇りが澤山ある。エベレストの高峯、西藏の高原、裏海の鹹湖、瑞西の山水、諾威の峽江、サハラ沙漠、ミシシッピの長流、アマゾンの巨流、ビクトリヤ、イグアーズの大瀑布、ヨセミテの溪谷、コロラド川の大峽谷、グランド、キャニオン、イエローストーンの間歇泉、北米の沃野、南米のセルバなどの如きは、何れも世界第一と稱せられる自然的の誇りであり、米國天賦の諸富源も、南亞の金剛石も、智利の硝石も、四時殆んど春の如き北米加州の氣候の如きも亦大いなる自然的の誇りである。各國各地の地理を説くに當つては、自然的の誇りにも注意を拂はなければならぬのは勿論であるが、一々の解説は之を地理書に譲り、茲には我が領内に於て、比較的新しく其の

名を知られた朝鮮の金剛山を概説することにする。
神聖鬼斧峻烈魁偉の金剛山 自然、人文を通じて、朝鮮第一の誇りとすべきものは蓋し金剛山であらう。金剛山は朝鮮の脊梁たる太白山脈に屬し、江原道北部の數郡に跨る一大山彙の總稱である。まだ人跡未到の秘境が少くない爲に、其の面積も判然しないが、凡そ十方里内外と見るのが、近似數らしい。殆んど全山粗粒狀黒雲母花崗岩より成り、石理が粗鬆であるのと、多種多様の節理に富んで居る爲に、著しく風化浸蝕の作用を受け、奇峯峻嶺臺々到處に聳立して其の雄を競ひ、怪巖巨石亦隨處に屹峙して其の奇を争ひ、石門、峽谷、溪流、飛瀑、碧潭、草木も皆千態萬容の装ひを凝らして全山彙を美化して居るのである。群嶺は古來一萬二千峯と號せられて居るが、最高點は毘盧峯で、海拔五千二百八十餘尺である。同峯より北は温井嶺、南は望軍臺、白馬峯等を連ぬ

る連嶺を界として、西方を内金剛（一名内山）と呼び、東側北部を外金剛（一名外山）、南部を新金剛と名づけ更に東方なる赤壁江の河口附近に於ける沿海の勝地を海金剛と稱するのである。即ち金剛山は四區に小別し得るのであるが、殊に雄渾壯大の絶景に富めるのは内外兩金剛で、内金剛の明鏡臺、望軍臺、水簾洞、萬瀑洞、靈源洞、外金剛の新舊兩萬物相、玉流洞、飛鳳瀑、九龍淵等は人間界を超越した神秘的絶勝で、寫眞、繪畫、筆舌等人間のあらゆる技巧を盡しても、到底其の真相を表はし得られないものと諦める外はないのである。

有名な文士菊池幽芳氏が、大正六年七月大阪毎日新聞に、朝鮮金剛山探勝記を二十七回に亘つて連載せられたが、其の初に金剛山を探勝した内外人の批評感想を書いて居られる。即ち明治二十七年に此の仙境を踏査した世界的旅行家英人イサベラ、バード、ビショップ夫人の著

書コレア、アノド、ハ、ネーバーの一節が先づ引いてあるが、其の文は次の通りである。

たしかに此の十一哩間の美は、世界の如何なる溪山の美にも超越して居る。中略……此處では記事の筆は唯一個の目録に過ぎない。美のあらゆる要素を以て充たされた此の大規模の峡谷の現在は、唯恍惚として人を痺痺せしむるのみである。

次に嘗て京城に駐割してゐた獨逸領事クリューゲルの文を引いてあるが、それはかうである。

其の雄大なる全景、山體の大膽なる構成、懸垂せる絶壁、斧斤の嘗て入らざる處、女林其の怪奇なる峡谷、純潔なる瀑布、急湍深淵に表るゝ光線と色彩の變化……嗚呼、世界の何處に其の匹儔があらうか。

更に田村博士の

金剛山の特徵は、第一は岩石的で、第二は量の大きさである。それも散漫な景

色でなく、エキシ的に統一された表現があり、一貫した精神がある。其の表現は極めて大膽豪放時としては甚だしく蠻的なもので、圓滿緩和なものではない。金剛山は實に山岳中の天才である。容易に二つと得難き偶發的のもので、遙に人力を超越し、技巧に關らない所がある。隨つて獨り造物者のみが支配す可き靈嶽である。……日本に之に匹敵する大風景を求めたならば、信越甲飛を併せた日本アルプスの連山に、妙義、耶馬の奇勝を加へ、更に之を二十里の間に縮寫したものと謂つても、尙物足りない。なぜならば萬物相の奇峯、九龍淵の峡谷……之に匹敵するものが、内地の何處にもありさうに思はれぬからである。

と云ふ批評を引いて暗に同感の意を表し、かくて菊池氏自身の感想をかう書いて居られる。

金剛山の發現は全く天才的である。私は金剛山は自然の産んだ最も怪奇な畸形であると思ふ。内地で金剛山に一番近い小さな模型を求むれば、其れは先づ耶馬溪を擧げる外はない。けれども百の耶馬溪を以てするも、尙金剛

の雄大怪奇を説明することは出来ぬ。それ程に金剛の溪谷は豪壯であり、複雑であり、崇高であり、神秘である。之を世界的名山とするに、何人も異存があらうとは思はれぬ。

以上内外人の批評を讀んでも、金剛山が娑婆世界を超越した世界的靈山であることは明かである。固より金剛山にも丸切り人工の美が加はつてゐない譯ではない。長安寺、表訓寺、摩訶衍庵、楡帖寺、神溪寺等の大伽藍及び其の末寺並に三佛岩、妙吉祥塔、巨里五重之塔なども多少の手傳ひをして居るのであるが、之等の人為的施設は、豪壯魁偉、峻烈奇怪を極むる金剛の全景に對しては、真に些細な藥味たるに過ぎない。金剛の最も偉大なる誇りは大自然が生み出した畏敬すべき岩石の美に在る。茲に自然的の誇りの一代表として金剛山を出したのも全く其の爲である。

三、人文上の誇り

人事を盡して天命を待つ。自然は測り知る可からざる偉大な力を備へて居る。其の巨腕妙技には人智を以て端睨し得可からざるものがある。世界的大事業として人類の誇りの一つに數へて居るパナマ運河の如きも、造化の目には地球が受けた規則正しい擦過傷位に映ずるであらう。思へば人類は微力なものである。けれども能く自然の偉大を知り、造化の妙を悟り得るものは人間だけである。其處に人類の誇りがある。人類は偉大なる自然の懷に抱かれて少しも之に反抗せず、しかも力相當の娑婆世界を形作り、其の世界の向上發展を期せんが爲に、孜々汲々として様々の施設經營を爲しつゝある。随つて人間を娑婆世界のものとして教育するには、自然の妙技よりも寧ろ痛切

な資料が人間世界の各國各地に陳列されて居る。それが所謂人文上の誇りて、地理教授上自然の誇りと對立せしめられる所以である。自然の威歴に堪へかねて、唯徒に崇高の感に打たれ、恐怖の念に襲はれるのみでは人類は萎縮する一方で、人間の誇りは無くなつてしまふ。敬す可きを敬し、畏る可きを畏れつゝ、又能く自然に親しんで、人間世界の向上發展を圖る所に人間の誇りがある。人類から見れば蟻や蜜蜂の仕事は大きいとは思はれない。併し彼等が孜孜營々として巢を造り、食を運び、子を養ひ、蜜を貯へる忠實眞剣な態度を見ると、感動せずには居られない。人類は大自然に對しては蟻たり蜜蜂たることを甘んじ、人事を盡して天命を待つ覺悟を以て活動を續けなければならぬものである。其の活動の結果の中に地理學上の所謂人文的誇りもあつて、個人の事業團體の經營、國家の施設中に人文地理の誇りが澤山あ

る。十和田湖の鱒の養殖事業 奥羽山脈中、青森、秋田兩縣の境上に、國立公園の候補地として有名な十和田湖がある。之を自然方面から眺めても、説く可き事は多いが、茲には其れを略して、人文上の誇りを述べることにする。元來十和田湖は周圍十數里に達する可なりの大湖であるが排水口たる子口こぐちから奥入瀬川おくいらせがわを十數町下つた處に、高さ凡三丈の銚子瀑がある爲に、魚類が湖中に溯上することが出来ない。其の上古來魚の事を一口言つても湖神青龍大権現の怒りを速くとおぢ恐れてゐた關係から、一向放魚する者もなく、随つて一魚半鱗も棲んでゐなかつたのである。然るに今や十和田湖は日光の中禪寺湖と並べ稱せられる鱒の養殖池となり、十和田の姫鱒の名が天下に喧傳せられる様になつて居る。それは全く和井内貞行氏の刻苦經營の功である。

和井内貞行氏は秋田縣鹿角郡毛馬内の士族である。一時は土地の小學校で教鞭を執つてゐたのであるが、後には轉じて小坂鑛山の支山たる十和田銀山に奉職することとなり、日夕十和田湖に親しむ様になつた。然るに湖中に一魚半鱗もゐないのを遺憾とし、魚類を養殖して青龍大権現をして顔色なからしめようと志した。かくて明治十七年先づ鯉を放流し、更に鮒、嘉魚などの魚苗を放流した。所が神罰を唱へて苦諫する人もあり、遂には迫害を加へる者もあつたが、氏は少しも其の志を挫げなかつた。爲に湖中に魚類を見る様にはなつたが、意の如く之を漁獲することが出来ない所から、收支が償はず、營利事業としての見込は立たなかつた。それでも氏は少しも屈せず、頻りに魚苗を放流して「魚狂」と嘲られ、親戚知人にも見離される様になつた。併し氏の決心は益々固く、日夜養魚に没頭して殆んど寢食を忘れ、東奔西走其の

策を講じてゐた。明治三十年神戸市に開かれた水産博覽會を觀て、大いに得る所あり、翌三十一年長男貞時氏を日光中禪寺湖に遣はして人工孵化法を研究せしめ、更に農商務省の水産講習所に就いて其の指導を受けしめ、同三十三年中禪寺湖から鱒の卵を求め、之に人工孵化法を施して放流した。然るに之も亦不成功に終つた。多年投資するばかりで一向収入の道が無かつた爲に、此の頃に至つて氏は殆んど數萬の財産を蕩盡し、頗る苦境に陥つた。外に援助を與へる者もなく、又同情を寄せる者もなかつたが、此の間に在つて、能く家計を收め、子女を教育し、氏をして全力を養魚に注がしめたのは、唯内助者勝子夫人のみであつた。

明治三十五年氏は青森縣の水産試験所を訪うたが、其の際偶然信州の寒天製造會社支配人中島庸三と云ふ人から、北海道支笏湖産の鱒を

パチエッポ(姫鱒)の移殖を勧められた。そこで氏は翌年五月其の魚苗三萬尾を十和田湖に放流した。元來カバチエッポは放流後三年を経れば最初の放流地に歸泳する回歸性の魚である。其の成否を氣遣ひながら待つこと三年。其の間氏の信用は地を拂ひ、資力も全く盡き、親戚故舊は勿論兩親にも見離されてゐたのである。然るに氏の至誠が天に通じたものか、明治三十八年十月一日カバチエッポの大群が湖面の水色を變ぜしむるばかり、頭尾相接して原放流地に歸泳した。大願成就！氏は之を見て狂喜し、直ちに勝子夫人を湖畔に誘ひ、共に鱒の大群を眺めて歡喜の涙を浮べたのである。

爾來湖の西南岸なる追手の孵化所に於て、人工孵化法によつてカバチエッポの魚苗を養ひ、毎年多き時は九百萬尾、少き時も三百萬尾を放流し、年々尺大の鱒凡そ百萬尾を漁獲して、奥羽地方は勿論東京にも供

給し、其燻製の如きは遠く米國に於て賞味せられて居る。カバチエッポは姫鱒とも十和田鱒とも呼ばれて居るが、貞行氏の姓に因んで和井内鱒とも稱へられて居る。其れは兎に角、和井内氏多年の努力は、能く千年の廢湖十和田をして全國屈指の鱒の養殖池たらしめ、蕩盡したる家産を恢復したるのみならず、湖畔二百の住民の生活を安定ならしめ、明治四十年四月二十五日綠綬褒賞御下賜の榮に浴した。湖神青龍大權現も湖の主南祖坊も全く顔色なしである。

勝子夫人は綠綬褒賞御下賜の前月病歿せられたが、湖畔の住民は其の婦徳を敬慕して、湖の西岸大川岱おほがわのぼたの麓に一社を建て、勝漁神社と名づけて、其の靈を祀つて居るのである。

十和田湖の幽邃閑雅なる風景は自然に備はる天與の誇りである。若し國立公園と定められるならば、其の誇りの裏書をして貰ふ様な譯

て、慥に十和田の名譽に相違ない。併し教育的意義に富む十和田湖永遠の人文的誇りは和井内貞行氏の養魚事業であらう。

千葉縣銚子の誇り 銚子は人文上の誇りに富んだ所である。一體世間で銚子と呼び、普通の地圖に銚子と書いてある市街は、行政上から云ふと、本銚子、銚子、西銚子と云ふ各々獨立した三町に對する總稱である。人口は三町を合して三萬有餘。中々景氣の良い處で、市制の布かれるのは千葉よりも先だ。と夙に噂が立つた程であるが、利害關係が一致しない所から、時期尙早し。と號して、今に三町獨立を繼續して居る。併し三町共に町續き丸で一つの市街の様に見えるから、世間普通の稱呼たる銚子と云ふ名を採用して話を進めよう。銚子は古來醬油の名産地として其の名を知られ、又漁業の一大中心として名高い處である。犬吠崎の銚子の燈臺も夙に海上生活者間に

注目せられ、平磯臺の銚子無線電信局も一般公衆用としては日本最初のものとして誰知らぬ者もない。銚子縮だけは殆んど其の影を没して、銚子の誇りにはならないが、其の代り履物用の簾表の製造が新に起つて居る。そこで順序に於ては話が逆になるが、年代に於て新しい方から銚子の四つの大きな誇りを概説しよう。

銚子の無線電信局は其の規模も通信距離も船橋の海軍無線電信局には及ばないが、試験用のものは別とし、一般用としては本邦最初のもので、明治四十一年五月十六日に通信を開始したのである。電信柱の高さは二百二十尺。鐵製の圓筒長さ十尺のものを二十二本接合せて立てたもので、之に接目の無い感電線が三筋懸つて居る。通信は主として米國航路に従事せる船舶及び近海を航行する船舶と交換するのであつて、嘗て桑港から布哇に向つて航海中の香港丸が、當局の發信を

明瞭に感受したこともあつた。其の距離は實に三四三三哩であるが之は例外。普通は晝間の通信距離が夏冬共に五〇〇哩、夜間の確實通信距離が夏は一二〇〇哩、冬は一五〇〇哩となつて居る。尙當局内には報時通信の設備があつて、直通電線を以て東京天文臺と聯絡し、毎夜九時から四分間、一分毎に無線電信によつて、自動的に外洋航海中の船舶に、中央標準時を通報することにしてある。通信取扱時間が晝夜不休であるから、無論交代制度ではあるが、事務室に這入つて見ると、技師は丸で黒いリボンを頭に縦にかけた様な工合に、電話の受話機の様なものを頭に取りつけて、始終コツ／＼働いて居る。日本人が米國に向つて太平洋を航海する時に、當局の通信圏を離れると、何となく淋しみを覚え、逆に歸航する時には、其の圏内に這入ると、非常に心強く又嬉しく感ずると云ふことであるが、さもある可きことで、米國航路に従事し

て居る船から見れば、當局が銚子第一の誇りと思はれるであらう。常に陸上に活動してゐて、直接、無線電信を利用したことの無い吾々が此處を訪うて見ると、人間到る處に様々の機關と職業があつて、複雑な國家、社會の運轉が圓滑に行はれて居るのであることを、今更の如くに感じ、假にも怠業氣分などを起してはならぬと自ら警める様になる。平磯臺から南行凡そ一里、君ヶ濱と古藻ヶ浦との間に突出する岩丘、犬吠崎に、普通に所謂銚子の燈臺がある。此處は銚子の郊外、高神村に屬して居るのであるが、銚子鐵道の經營にかゝる銚子、外川間の軌道自動車の一驛に當り、客車を聯結した自働車が定期に軌道上を走つて居る。又此の近邊が所謂銚子の海水浴場で、其の海岸に曉鷄館、快哉樓、御風館など云ふ立派な旅館や、伏見宮の御別邸などもあつて、矢張り銚子の勢力範圍である。

犬吠崎の燈臺は明治七年十一月十五日の初點である。基礎から燈火までの高さは九十尺、海面から燈火までは百六十八尺で光達距離は十九湮四分の一。純白な圓塔が高く天に沖して居る雄姿は痛快と言はふか、壯快と言はふか、堂々たる威風があたりを拂つて居る様に思はれる。案内を請うて燈臺内部の梯子段を登ると、初の間は平氣であるが、次第に足の運びが鈍くなり、燈火室に達する頃には、足がさながら棒になつた様に思はれ、胸の動悸が高まつて、暫くの間は案内者の説明も耳には入らない。燈火室の外の廻廊に出て見ると、其眺望は實に壯大であるが、一度直下を見下すと、忽ち恐怖の念に襲はれて逆も長居は出来ない。聞けば燈臺の塗替への時などには、下が見えない様に足場を拵えて置かないと、馴れた者でも安心して仕事が出来ないさうである。燈火の監視は毎夜二時間交代で勤めるのであるが、暴風の時は燈臺が

一尺も揺れる爲に、船暈同様の苦痛を感じ、交代の時刻が来ても、容易に梯子を下りることが出来ない程の苦しさに會ふこともあると云ふことである。此の燈臺を頼みにして遠く海上を走つて居る船が居るのだと思へばこそ勤められたものである。こんな話を聞くにつけても、世の中には色々の機關があつて、普通の人が一向氣にかけてゐない所で、忠實に働いて居る人のあることを痛切に感じ、襟を正して敬意を表する様になる。銚子沖を航海して居る船から見れば、此燈臺が銚子第一の誇りと思はれるであらう。さて此の附近は季節によつては、濃霧の爲に燈火では船の目標にはならないことがある。其の場合には霧笛を鳴らす必要があるから燈臺の脇に立派な霧笛工場が出来て居る。踵を廻らして本銚子に引返すと、此處には特に漁家が多い。利根川河口に近い右岸の獵師町で、其處此處の空地には鰈や鰻や鰯などが干

所が銚子は古來醬油の名産地で、野田と並べ稱せられる處である。銚子に在る太い煙突は皆醬油屋のものとして見て誤りはない。山サ(今)山十(今)鬚田(今)地紙サ(今)などが殊に有名な醬油であるが、其の起元を尋ねると、和歌山縣有田郡廣村から移住した人の試醸が銚子の醬油の始まりだと云ふことである。それは正保二年の事だと言はれて居るから、今(大正十三年)から二百七十九年前である。元來銚子は關東地方中、最も著しく太平洋に向つて突出した陸地の東端に位して居るから、冬は黒潮の北流によつて暖く、夏は親潮の南下によつて涼しく、四季に於ける氣候の變化が少くて、寒暑の差が甚しくない。之は醬醪の酸酵に都合がよい。又銚子は海に近い爲に、空氣が常に濕潤である。之が醬油の香氣の發散を防ぐことになる。尙又此の地方は太古海であつた處であるから、地中に澤山の貝殻などが埋まつて居る。それ故井戸に湧

出る水が自然に石灰分を含んでゐて、麹菌の活動を圓滑にし、醬油の味を良くするのである。即ち銚子は醬油の醸造上、天の時と地の利とを兼ね備へた土地である。此の地が夙に醬油の名産地として其の名を天下に知られ、廣く内外諸國を其の販路とする様になつたのは偶然ではない。

町内に規模の宏大な醸造場が澤山あるが、其の霸王とも謂ふ可きものは濱口儀兵衛氏の經營にかゝる山サ、山十の醸造場である。山十は元岩崎氏の經營であつたが、大正七年に濱口氏が譲り受けられたのである。予は大正六年以來銚子に出講すること三回、同年四月山サの一工場を參觀して其の大仕掛けなのに驚いたのであるが、本年(大正十三年)一月出講の際、銚子の貨物のみを取扱ふ新生停車場附近に新築せられた鐵筋コンクリート煉瓦造の最新式醸造場を參觀して、醸造法の進

歩に驚き、又山サの大發展を祝賀せざるを得なかつた。此の醸造場は舊來のそれとは全く其の趣を異にし、出來得る限り機械力を利用して人手を省き、しかも芳醇なる醬油を經濟的に造る方針であるから、蒸氣、電氣、壓搾空氣によつて様々の機械を運轉し、大豆の蒸煮、小麥の煎上、鹽水の煮沸、麴室の保溫、醬膠の壓搾、生醬油の火入れ、製品の運搬等何から何まで機械力を應用して居るのである。随つて舊來の醸造場ばかりを見て居る人には想像もつかない仕組になつて居る。製品を各地に輸送する數量が毎日々々莫大であるから新生の貨物驛から場内に線路を引込み、借切りの貨車に樽や瓶を積込み通して居る。魚の市場も漁船の發動機の音も景氣がよいが、此處の景氣も亦素晴らしいものである。場内の一部に立派な醬油研究所があつて、専門の技師が年中醬油に關する學術的研究に従事して居る。聞けば山サの當主濱口氏は

明治二十六年英國に留學して化學を専攻し、歸朝後同三十二年に日本最初の私立醬油研究所を設けた人である。其の後事業の發展に伴つて、一層其の設備を完全にする必要を感じ、大正十一年に現在の研究所を新築して、其の設備を理想的にしたのである。是も鐵筋コンクリートの煉瓦建て、醸造場と同様、屋上庭園まで設けてある。兎に角山サの發展は驚く可きもので、此の最新式醸造場の建築費が凡そ五百萬圓と云ふ評判である。國定の地理書の挿書に野田の龜甲萬の醸造場が出てあるのも結構であるが、予は寧ろ山サの最新式醸造場を出して見たい様に思ふ。前に述べた千葉縣營の銚子築港費十年間の總額が九百五十萬圓であるから、一年の平均支出が百萬圓近くである。個人の經營であるが、山サは年々それ以上の資金を動かして居るのである。個人の努力經營も是に至ると偉いものである。研究所の屋上庭園に

立つて、殆んど銚子全町を俯瞰し、方々の醸造場の煙突を望みながら、あれは何の醸造場、之は誰の経営などと説明を聞かされ、尙頻りに聞える利根川の漁船の絶間ない發動機の音を聞いて見ると、銚子第一の誇りは陸では醤油の醸造業、海では漁業であると思はずにはゐられなかつた。

福島縣白河町の誇り

福島縣の白河と云ふよりも、奥州白河と云ふ方が奥床しい様な心持がしてならない。能因法師の「都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關」で名高い關所址は、白河の町からは南方に約三里も離れて居るのであるが、知らない人は關所と町を勝手に結び付けて、古くから耳馴染のある町の様に思つて居る人がないでもない。白河町は有名な樂翁公(松平定信)の舊城下、明治戊辰の白河戦争は町の郊外で戦はれたのである。今は東京上野驛から普通列車で

五時間半、急行ならば四時間餘で達するから、都をば朝飯時に立ちしかど、晝飯時に白河に着くと並べた人もあり、予の父は往年「白河のあたりに来れば退屈し汽車にも少しあき風ぞ吹く」と詠んだことがある。予は先年會津、新潟方面に出張を命ぜられた時、上野で乗車後間もなく眠りに就き、白河邊は白河夜船、いつ通過したやら一向氣がつかなく、それから目覚めて後に「大宮も小山も夢か宇都の宮いつ過ぎたやら白河の驛と苦吟したことがある。其の白河驛は近年改築せられて中々立派な停車場になつて居る。現在は棚倉に通ずる白棚鐵道の起點であるが、將來此の線が水戸方面と聯絡を保つ様になると、此の驛は交通上一段の重みを加へることになるであらう。

さて白河町には、誇りとす可きものが少くとも三つある。其の第一は馬市である。元來福島縣は日本屈指の馬の産地で、縣下の要地五十

餘箇所馬市が立つのであるが、其の首位を占めて居るのが白河で、其の盛大なことは日本一と稱せられて居る。殊に有名なのは春秋二季に行はれる白河町營の馬市で、幾千頭の馬匹が全縣下から集まり、盛に其の賣買が行はれるのである。随つて其の時に馬博勞の外、馬草賣り、按摩、飯盛女などが一時に町内に入込み、非常な賑ひを呈するのである。予が白河に出講したのは夏であつたから、馬市の實況を目撃することは出来なかつたが、其の代り同町第二の誇りたる南湖公園に數時間清遊して極暑を拂ひ、尙樂翁公の遺風を追慕することが出来た。

南湖公園は白河の市街から凡そ一里程隔つて居るが、町營の一大公園であるから、殆んど終年遊覽客が出入するのである。もと南湖は丘陵の間に挟まつた濕潤な沼澤地で、葭葦などの生茂つてゐた處であるが、天明の飢饉に當つて、時の領主樂翁公が貧民に職を與へんが爲に、先

づ千代の堤を築かせて水を湛へ、更に樂しみを民衆と偕にせんとの趣意から、或は京都、吉野地方から取寄せた楓、櫻などを湖畔の丘陵に植付け、或は松虫、鈴虫などを放ち、或は園内十七景を選定して四民遊覽の地に充て、丘腹に設けた共樂亭で臣下と共に四季の眺めを賞することにせられたのである。亭は極めて質素な建物で、室内に鴨居はあるが敷居はなく、共樂の意味を示した構造になつて居る。亭も白河町の保管に屬し、保存上常には全く閉鎖してある。湖上に遊船が浮んで居るが、之も樂翁公がもと領民に舟の操り方を練習させる爲に浮べられたものだと云ふことである。湖中には蓴菜が多くて當公園の名産になつて居る。

次に尙白河町の誇りとす可きものに友月山と云ふ公園がある。小規模ではあるが、白河町の中央部に在る小丘に公園の設備を施したも

のであるから、丘頂に立てば、町の大半を眼下に眺め、眸を放てば、那須火山の雄姿を望み得る形勝の地である。随つて白河町を訪ふ人は大抵此の公園に登るやうになつて居る。所が此の公園は町内で紺屋業を營んで居られる須藤儀兵衛氏の私有地である。聞けば氏は大財産家と云はれる程ではないが、非常な篤志家で、町の爲に盡さうとの熱心から、少からぬ費用を投じて公園とし、其の維持費をも負擔しつゝ、公開して居られるのである。氏は今尙健在で家業を勵みながら、朝夕自ら公園見廻りの勞を取つて居られる。爲に公園附近の人々は毎日氏の姿を見る度に、尊敬の眼を以て目迎目送して居るのである。察するに氏の此の美舉は樂翁公の南湖公園の趣旨に胚胎したものであらう。それは兎に角斯様に考へ來ると、自然的の誇りに様々あるが如く、人文上の誇りにも趣の違つたものが澤山ある。

日本石油株式會社の誇り

我が國に於ける石油業界の霸王は日本石油株式會社である。顧みれば明治八九年の頃、工務省の御雇技師米人ライマンが我が國の油田調査を行つて、本邦油業の前途に對して悲觀的の發表をした。其の理由とする所は、第一日本には古生層が少くて、第三紀層が多い。地質が新しいから含油量が多くない。第二に日本は地域が狭いから油田も狭い。第三に日本は火山國で、地層が錯雜してゐるから、地下に多量の石油が含まれてゐない」と云ふに在つた。所が越後は往昔燃ゆる水を献上した國で、三島郡尼瀬町の沿海に古來石油が點々浮び出る處があつた。其の水面を草生津の澗（臭水の意）と稱へ、土地の人々が之を藁で掬ひ上げて、燈火用に供したこともあつたが、氏神の崇りを受けると言ふ者があつて、遂に其の事も止んだと云ふ傳説がある。明治時代に入つてから尼瀬の海濱に油井を掘つたも

のがあり、明治十九年頃には多少盛況に向つたが、多くは一時の僥倖を冀ふ投機的の仕事であつた。併し此の頃になると石油熱も高まり、有志者が段々調査して見ると、ライマンが悲觀説を發表した當時、米國の主なる油田は、ペンシルバニア、オハイオ兩州に在つて、其處の地質は古生層であるが、其の後盛になつたカリフォルニア州の油田や、露國のバクラー、羅馬尼亞等の油田は第三紀層に在ることを知り、又バクラー附近の油田の地域は左程廣くもないが油量の豊富なことも分り、尙メキシコや南洋方面の油田が、地層の錯亂せる火山地帯に在りながら、多量の石油を産することを知つて、ライマンの悲觀説を必ずしも信ずるに及ばないと考へる様になつた。かくて研究を重ねるにつれて、我が石油業の不振の原因は、寧ろ大資本を投ずる者のないこと、石油に關する智識の豊富な技術者、職工の無いことに在ると悟る様になつて來た。

斯様な譯から、故山口權三郎氏及び日本石油の現社長たる内藤久寛氏などの人々が有志と謀り、石油會社を組織する計劃を立て、明治二十一年二月創立委員が長岡の敦賀屋に會合して晚餐を共にしつゝ、其の相談をしてゐた。所が極寒の季節なるに拘らず、珍らしくも一羽の蝙蝠が室内を翔り廻つた。之を見て一同は、蝙蝠と福とは國音相通じ、蝙蝠も亦同様。福に偏するとは福の舞込む前兆なり。之を商標に採用す可しと評議一決、新潟の篆刻師大江萬里に圖案を托し、出來上つたのが今日普く世間に知られて居る、蝙蝠印で、全國津々浦々に至るまで其の翼を擴げて居るのである。かくて同年五月十日、日本石油會社を尼瀨町に創立したのであるが、當時の資本金は十五萬圓であつた。

愈々油井の採掘に着手したが、其の方法は手掘と上總掘、所謂人工掘法であるから、六百尺以上の地下には掘進むことが出來なかつた。外

國ではどうして居るかと云ふ譯で、翌二十二年山口權三郎氏が歐米漫遊の途に上り、親しく米國の油田を視察して、紐育から米國式綱掘機械と鐵管を買入れて歸朝し、明治二十三年十二月始めて之を尼瀨油田に使用した。御蔭で二千尺以上の井戸を掘ることが出来る様になり、次第に事業が發展して、資本金も明治二十七年には三十萬圓となり、同二十九年には六十萬圓に増額した。所で同三十一年になると北越鐵道が全通して、柏崎が海陸運輸の便を兼備する土地となつた上、其の附近の長嶺に當時本邦稀有の良油田を發見し、石油業の中心が柏崎方面に移る氣運に向つた爲に、同三十二年本社を柏崎に移し、同三十三年には資本金を百二十萬圓に増加し、更に同三十五年には二百四十萬圓とし、同四十年には五百萬圓に増額した。

其の間に内藤社長は二回（明治三十年と同三十七年）、歐米の石油業地

を視察して、油田の狀況、鑿井法、石油貯藏法、送油法、製油法等一切の事項を調査し、參考になる機械類は寫眞に寫して持歸り、今は獨立して居るが、もと日本石油會社の附屬として建てられた新潟の鐵工所で、寫眞を手本に鑿井機などの製作を試みた。所が其事が米國に知れて、日本人は油斷がならない。何でも眞似をする人間だと警戒を加へる様になり、其の後屢々視察員を派遣して居るが、殆んど石油業の眞相を観ることが出来ない様になつて居ると云ふことである。随つて其の後は新式の機械類が出来ると、早速取寄せて使用する様に心懸けて居るのであるが、或時最新式の唧筒を米國から取寄せて見たが、其の使用法が判然しない。そこで柏崎製油所協の鶴川に据付けて水揚の試験をして見たが、どうしても揚らない。すると或人が「之は察するに、鯰か鰻が吸上げられて瓣に引掛つて居るのであらう。其れを日乾しにするか、腐

らすかしなければ、水揚げはしない」と言つたので、唧筒引上げの準備にかゝつた。所が其の際一向機械の智識の無い者が、方々いぢつて居る中に、どうした調子か、水を吸上げたから、鯨ではなかつた」と云ふ譯で、大笑ひの中に首尾よく試験を終つたこともあつたさうである。

其の後、社運は益々發展、資本金を一千萬圓にし、二千萬圓に増し、近年寶田石油會社と合併する前には四千萬圓に増額した。其の間に於て特筆す可きものゝ一つはロータリー鑿井機の輸入である。同機は米國から購入したもので、明治四十五年三月之を西山油田に試みたのが最初であるが、其の絶大の威力あることを認めて、續々輸入する様になつた。之が爲に日本の石油業が俄に面目を一新することになり、石油地方では兒童走卒も其の名を知らないものはないのである。大正三年五月二十五日秋田縣の黒川油田で自噴一萬石の油井を掘當てたの

もロータリーであつた。之は秋田縣が石油産地として其の聲價を高める本になつたのである。同年八月本社が柏崎から東京に引移つたのも、一つは秋田縣の産油額が激増した爲である。尙同年十二月以來西山油田でガソリンプラントを實施し、天然瓦斯から揮發油を製造することをはじめた。之は殆んど同時に直江津製油所構内で始めた洋蠟製造と共に日本最初の企て、共に本社の誇りとして居るものである。兎に角、日本石油會社は、資本金十五萬圓から四千萬圓に仕上げ、我が國の石油の相場は、日本石油、寶田石油、ライディングサン、スタンダードの四つの社で協定する地位を得るに至つたのである。寶田石油會社は明治二十六年一萬五千圓の資本金で開業したのであるが、之も次第に發展して近年四千萬圓の會社とし、大正十年日本石油會社と合併したのである。それ故現在の日本石油株式會社の資本金は八千萬圓で、殆

んど全國主要の油田を占領し、我が國では押しも押されもせぬ石油業の霸王となつて居る。顧みれば明治十年に於ける我が國の原油産額は僅に一萬石餘に過ぎなかつたのであるが、近年は大抵二百萬石以上を産する様になつて居り、蝙蝠印の油送車（タンクカー）が始終鐵道を走る様になつて居る。之は主として日本石油會社創業以來の努力の結果で、我が石油業界の誇りになる會社である。

瑞西の誇りは世界の公園

瑞西は自然の恩恵と國民の努力とが相寄り相俟つて、渾然融和の一體となり、世界各國の遊覽客を迎へて居る誠に平和な一大公園國である。是が瑞西の大なる誇りて、自然と人文兩面の誇りが能く融合調和して居ることは、殆んど世界に比類なしと謂つても差支はあるまい。元來瑞西の面積は凡そ二千六百六十三方に過ぎないから、屬島をも含めた我が九州の面積（二六一七方里五

四）よりも稍廣いのである。敢て大國とは謂はれないが、隣接せる獨佛、伊、埃四箇國に對する緩衝地で、西曆一八一五年（文化十二年）以來の永世中立國であるから、自ら事を起さなければ、他から侵される心配のない平和な國である。國內の秩序維持の爲に二十一萬餘の常備軍はあるが、其の出勤を請ふ様な内亂もなければ、騒動も起らない。一體此の國は殆んど獨立自治の小邦二十餘州より成る聯邦共和國であり、全人口凡そ四百萬中の約七割は獨逸人で獨逸語を使ひ、廣く國の中央部に廣がつて居るが、國の西部には佛蘭西人が住んでゐて、佛語を用ひ、南部には伊太利人が住居して伊太利語を使用して居るのであるから、單に言語だけではなく、法律、制度、風俗、習慣も異つて居るのである。随つて數世紀前までは各州相互の間に紛擾、戦争の絶間がなかつたのである。爲に嘗ては心ある多數の僧侶がジューネーブ湖の北岸なるローザンヌ

町の公園に集まつて、せめて一年中の或時期だけは、各州間の争鬭を休止し、以つて民力を休養せしめようとの祈禱や相談をしたこともあつたと云ふことである。然るに今は各州睦じく一致して極めて平和な一國家を組織して居る。歐洲の大戦によつて骨身に徹する苦を嘗めた上、今尙戦後の暗雲に鎖されて不愉快な日を送つて居る人々が、瑞西を羨望し、瑞西に遊んで平和氣分を味ふのを楽しみにして居るのは無理のないことである。

國の南部には、アルプ山脈が幅廣く連亘し、西北部には蜿蜒ユラ山脈が其の座を占めて居り、兩脈の間にも山岳丘陵が起伏して居るのであるから、國の大部分は山地である。其の上山麓諸處に、ジュネーブ(レマン、ニユーシャテル、ポルデン、チーリヒ、ルツェルン、マデオレ)を始め大小幾多の湖水が湛へて居るから、農作物を供給する耕地は極めて少

い。尺土寸地をも惜んで麥類、馬鈴薯、果樹等を栽培して居るが、固より國人の需要を満たすことは出来ない。年々外國から莫大の食料品を輸入しなければならぬのである。又山岳國に似合はず鑛山の乏しい國で、鐵、岩鹽等を多少産するのみで、工業上必須の石炭は皆無である。因つて動力をライン河、ローヌ河などの上流たる當國山間の溪流を利用した水力電氣に仰ぎ、盛んに工業を營んで居る。絹織物や時計は當國主要の工業品である。尙又山地には巧に林業を營み、丘陵地は之を牛、羊などの牧場に充て、只管地の利を増さうと努力して居る。瑞西人の質素勤儉の美風はかう云ふ點から養はれて居るのである。併し此の國の大切な財源として見逃す可からざるものは外國からの遊覽人で、此の國自然の山水の風景が、遊覽人を招致するのである。瑞西は山岳に富み、溪谷に富み、急流、激湍、湖沼に富める國である。し

かも是等が皆瑞西の風景を形作る要素であり人爲の加はつて居る森林、牧場も亦與つて其の美觀を増して居るのである。國の西北部に連るユラの連山は高さも低く、亦奇抜な山相を備へて居る譯ではないが、アルプ山脈は高山峻岳に富み、一萬尺以上の高度を有する峯が十二座ある。伊太利との境上にある當國の最高峯ローザ山(海拔一五三〇五尺)を始めとし、マッターホルン(二四八六六尺餘)、フィンステルアールホルン(二四一〇七尺餘)、ユングフラウ(二三七五一尺餘)等山容の崇高雄大な幾多の名山が終年氷雪を戴いて天を摩し、朝暉夕陽に反映して且暮其の色彩を變ずる。之より流下する數百流の氷河が山の中腹、凡そ海拔四千五百尺の地點に至つて盡きると、それから下は森林が遠く連つて緑を競ふ。山麓附近の丘陵は手入の能く行届いた牧場で、塵一つ見せぬ清潔さを示し、綺麗に洗ひ清められた牛が、首革について居る鈴を

鳴らしながら、悠々牧草を食んで雅趣を添へて居る。溪流は時に懸崖に懸つて飛瀑となり、又集まつて明媚なる湖水となる。其の水は故ら瀟過でもしたのかと思はれる程に清澄で、紺碧の水面に半白の山岳を反映し、大小の帆船、汽船が湖上を來往して、自ら風景に變化を與へる。都會は勿論村落の農家に至るまで相當の思慮分別を以て天與の風景を損しない様に注意せられて居るから、瑞西の全土が一大公園たるの觀を備へて居るのである。之が遊覽客の多く出入りする所以であり、遊覽客の消費する莫大の金錢が瑞西全體の金融を圓滑ならしめて居るのである。

國民は夙に然る所以を辨へて、遊覽客を尊重し、其の招致、滞在、遊覽、登山一切の便利を圖る上に於て至れり盡せる設備と方法を講じて居るのである。地勢高峻なる山岳國たるに拘はらず、鐵道の延長が約四千

哩に達し、世界最長と稱せられる長さ十二哩のシンプロンの隧道や九哩四分の一の長さを有するサンゴタルドの隧道や、長さ九哩のレッチベルグの隧道などが、萬難を排して開鑿せられたのも、一つは全歐洲交通上の要地に當つて居る爲もあるが、又一つには觀光客の招致、遊覽の便を圖る爲もあるのである。急峻な高山にも或は登山用のケーブルカーを設け、或は登山鐵道を敷設して電車を上下させ、湖上には音楽室もあれば圖書室もあると云ふ様な遊覽船を浮べて、觀光客をして樂に愉快に山水の美を鑑賞せしめる。極暑の候湖水浴をする人の爲には、適當の位置を選定し、水底の深い所には金網製の底を適宜の深さに沈めて危険を防ぐ様にしてあるから、安心して水泳も出来る。

旅館の設備、待遇法の發達せることも世界に著名である。其の使用人養成の機關として、旅館業者協會が學校を設立し、外國語、地理、簿記等

の教授をして居ると云ふことでも其の一端を察することが出来、又遊覽客の出入の最も多い夏季には、英吉利、佛蘭西あたりの貴族や富豪の令嬢が、外國人に對する應接や待遇の態度、見習ひの爲に、瑞西の一等旅館の給仕に住込むと云ふことによつても亦其の一斑を察することが出来る。斯様な次第で、瑞西人は遊覽客に少しも不愉快を感ぜしめず、出来得る限り満足せしめようと努力して、一日に百千金を投じても氣に懸けない様な長期滞在の英、米の貴族、富豪に對しても満足を與へ、獨佛、白等近隣の諸國から若干の貯蓄を懐にして、數日乃至十數日の遊覽客に對しても亦相當の歡樂を得させる様に心懸けて居るのである。何處の國にでも有勝ちな宿引の見憎い競争もなければ、ウルサイ勸誘もなく、又客の足元を見て品物を故ら高く賣付ける様な弊風も無い。小賣商店の店番も、自動車の運轉手も、遊覽の案内者も、皆能く其の意を

體し無法の暴利を貪る様なことが無いから、旅客は安心して氣持よく遊覽も出來、滞在も出来るのである。つまり人も自然も歩調を一にし、遺憾なく其の美を發揮して觀光客を送迎して居るのである。

かう云ふ國であるから、瑞西は歐洲戰爭中、直接戰爭に關係はしなかつたが、其の影響によつて非常な打撃を受けた。即ち開戦以來遊覽客がバツタリ來なくなつたのみならず、食料品、工業原料の輸入が殆んど杜絶した。前にも述べた通り、瑞西は山國。耕地が少いから、小麥の如きは、自國産のみでは僅々二箇月の需要を充たし得るに過ぎない。随つて小麥は多く露國から入れ、野菜類は主に伊太利から入れてゐたものである。又石油や砂糖は主として羅馬尼亞の供給を仰ぎ、鐵、石炭及び機械類は大部分獨逸から輸入してゐたのである。然るに歐洲戰爭の開始と同時に、殆んど是等の輸入が杜絶してしまつた。已むを得ず

是等の必需品を米國から仰ぐことにした。然るに一旦瑞西に這入つた品物が多少獨逸方面に通り抜ける傾向が見えて來た所から、聯合軍側の英佛二國が協議して、首府ベルンに三エス會社を設けて、瑞西の輸出入を調節することとし、辛ふじて瑞西人が生存するに必要な程度の物資を供給することにした。そこで瑞西は非常な困窮に陥つた。それ故後には聯合國側が瑞西を捕虜や傷病兵の收容所にあて、多少の潤ひを得る様にしたのである。

併し、大戰後の今日、英國は勞働問題に頭を痛め、佛蘭西は半死半生に頻せる獨逸から無理にも賠償を吐出させて大戰の創痍を癒さうとあせり、露西亞は勞農政府の專制政治に苦み、伊太利も奧太利も洪牙利も土耳其も種々の不幸に困り抜いて、殆んど歐洲全土がまだ不愉快極まる暗雲に包まれて居るに拘はらず、瑞西は次第に恢復して又元の平和

な公園國となり、從來此の國の誇りの一つになつてゐた萬國赤十字社本部及び萬國聯合郵便電信局の外、新に國際聯盟事務局并に國際労働局の所在地として、平和氣分と國際的氣分の濃厚な遊覽國となつて居るのである。

四、或人の批評

我が意を得た批評 土地には自然、人文の兩面に亘つて大小様々の誇りのあることが少くない。地誌教授に於て各國各地を紹介する場合に、其の大なる誇りを看過しない様に心懸けたいと云ふのが本章の趣意である。舊來の地理教科書は勿論、地理書も地理教授も土地の誇りを誇りとして紹介する熱が乏しく時には折角誇りに觸れながら、それが尊重す可き誇りであると響かず玉石混淆どれもこれも書める

ばかりで、味の出る程噲締めることなしに通過する弊がある。殊に人文方面の誇りに對する注意が甚しく缺けて居るから、予は嘗て雜誌、教育研究第二四二號に「土地の誇り」と題する短篇を掲載して、世の注意を促したことがある。然るにそれが或る人の批評の種になつてゐたと云ふ噂を傳聞したから、先づ其の文を掲げよう。

贅澤な廣告塔

目下（大正十一年）東都上野公園内に開催中である平和博覽會の會場内外には意匠を凝らした廣告が随分多い。俗悪なもの、奇抜なもの、贅澤なもの、貧弱なもの、種々様々であるが、廣告の第一要件たる「人目を惹かう」とする苦心は、其の何れにも認めることが出来る。

さて様々な廣告の中、平和博の一大偉觀とまで評せられる程に、人の注意を惹いて居る廣告の一つは、不忍の池中に屹立せる水晶塔である。塔は高さ百五尺の七層樓。總硝子張で、其の表面は三千六百平方尺。塔の上から流落ち

る水の分量は一日に九千六百石。夜間には三千六百餘の電燈が點々五彩の光りを放ち、落下する水に映じて、一層の美觀を呈するのである。かくも贅澤な廣告塔は何の爲に建てられたものであらうか。我が國に於ける足袋の霸王と稱せられて居るつちや足袋の廣告である。其の本社は福岡縣久留米市の米屋町に在つて、つちや足袋合名會社と稱し、工場を同市白山町の外、同縣柳川町及び田主丸町並に隣縣の佐賀市牛島町にも置いて、盛に足袋を製造して居るのである。

最初の資本は僅か一圓五十錢

つちや足袋の創業者は故倉田雲平氏（大正六年六月十七日歿す）である。聞く所によれば、氏は久留米市米屋町の生れ。明治六年僅か一圓五十錢の資金を以て、足袋の製造を始め殆んど寢食を忘れて努力奮闘、製品を上等品一種と定め、薄利多賣、正札厲行、精品統一を營業の方針と爲し、自家の商號から、つちや足袋と命名して賣出した。幸に品質精良の故を以て、次第に世の信用を得、明治十年西南の役が起るに及び、軍隊用の足袋、袴下等の製造を一手に請負うて、

大いに好評を博し、遂に業務大發展の氣運に向つた。是より漸次規模を擴大し、品質の改良、技術の研究、機械の發明等に全力を注ぎ、堅實なる營業法によつて事業を經營した爲に、遂に日本第一と稱せられる足袋屋となり、明治四十四年には辱くも侍從御差遣の光榮に浴し、爾來其の工場には、皇太子殿下及び閑院宮朝香宮、久邇宮、梨本宮等各殿下の臺覽を辱くし、大正三年七月六日、綬綬褒章を受けたのである。

事業の擴張と同時に倉田氏は店員、職工の養成待遇方法に意を注ぎ、又廣告術にも餘程の苦心を重ねたのであるが、是等の苦心も亦今日の成功を見るに至つた一因である。聞けば嘗て氏は長崎市を販路にしようとして、足袋は〇〇〇足袋に限る」と云ふ廣告のビラを市中に貼付けたことがあつたさうである。之は見た人々は何れも不審の眼で迎へたが、數日の後、つちやの三字を書加へて人々を驚かしたと云ふことである。今度の平和博覽會に當つて、つちや足袋合名會社が思ひ切つた廣告塔を建て、人目を惹く廣告をしたのも、創業者倉田雲平氏の廣告術を大規模に適用したものであらう。兎に角倉田氏創業

のつちや足袋は久留米市の大なる誇りの一つである。

土地の誇りの一例

久留米市は人口約四萬四千の都市で、福岡縣下の七市中第六位の都會に過ぎないが、土地の誇りとす可きものは少くない。遍照院に高山彦九郎の墓のあることも、勤王家眞木和泉守保臣を出したことも同市の誇りである。又第十八師團司令部のあることも、井上傳が絣を發明したことも、其の絣が今に至るまで盛に織出されて居ることも、藍胎漆器の産地たることも、つちや足袋が非常な發展をなしたことも亦同市の誇りとす可きであらう。併し高山の墓のあることの如きは、歴史科で彦九郎の傳を授ける場合に説くのが至當であり、眞木和泉守の銅像が水天宮の境内に建てられて居ることの如きも、幕末維新の歴史を教へる際、保臣の事蹟を説くとすれば、其の時に附説すればよいことで、地理教授の場合には、教授時間に餘裕でもあれば兎に角、さもなければ割愛しても差支はない。又井上傳が苦心の末、絣を發明したことも、現今の如く修身科で説くとすれば、其の苦心談は地理教授で、之を説き聞かせる必要はない。

併し現今に於ける久留米絣の隆盛は、久留米市の地理材料として擧げてよいと同時に、つちや足袋も同市の地理材料に加へてよいと思ふ。其の産額は絣よりも少いかも知れない。又單に工場の規模のみを比較すれば、他の土地に、つちや足袋以上に大規模の工場があつて、しかも地理書に載せられてゐないものもあらうが、それに氣兼ねして久留米市を説く場合に、つちや足袋の紹介を遠慮するには及ばない。丁度京都市を紹介する場合に、賀茂川を説く様なものである。即ち他の地方を説く場合に、賀茂川以上の流程、水量を備へて居る川が幾筋あつても、特に授ける必要が無い爲に、之を授けないことがありながら、京都市を紹介する場合には、平氣で賀茂川を説くのと變りはない。

以上久留米市を一例とし、つちや足袋を其の誇りの一つに數へたのは、決してつちや足袋の提灯持をする爲ではない。或る土地を紹介する場合に、其の土地の人々が誇りとせるもので、しかも地理材料としての價値もあり、又教育的意義あるものを取逃したくないと思ふからであり、尙一方には地理書特に地理の教科書類には、都邑を記述する場合に、大學とか縣廳とか師團司令部とか

云ふ官傳的公共建造物を擧げることゝ努めて、其の地に於ける他の誇りを顧みない傾があり、又、何々盆地の商業の中心地なり」とか、何々高地の中心市場なり」とか、太平洋方面の中心都市をなす」とか云ふ様な當り障りが無いと同時に、有難味も少い抽象的記事の多い弊があると認めて居るからである。一體小學校用の地理書にまで載せられる様な都邑は大抵其の地方地方に於ける屈指の都會で、或は行政上の中心となり、或は學術上の中心となり、或は軍事、經濟等の中心になつて居るのであるから、例へば、若松は會津盆地の中心都市なり」とか、盛岡は北上川流域の中心都市なり」とか、水戸は那珂川下流地方の商業の中心なり」とか記述すれば、何の雜作もなく、又誤りもないが、其の代り敬意を表す可き記事でもない。

五人形を美術品に仕上げた人

敵國降伏の御宸筆三十七枚を藏する宮崎八幡も、龜山上皇や日蓮上人の銅像も福岡市の誇りの一つで、歴史教授の際に於ける材料の一つになる。九州大學や福岡縣廳も福岡市の誇りとなつて居り、博多織や博多人形も同市の名産

として、將又其の誇りの一つとして廣く世人の知る所となつて居る。それ故如何に字數を儉約する地理書でも九州大學や福岡縣廳の所在地たることを書漏らして居るものはない。併し博多織や博多人形は、其の工場の規模や産額が近年著しく發展した所謂北九州の工業地に於ける工場などとは比べ物にならないと云ふ廉によつてか、之を顧みない地理書もある。殊に博多人形は其の産額が博多織のそれよりも少い爲に、博多織は記載してゐても、博多人形を紹介しないと云ふ地理書もある。固より之は博多人形を輕蔑すると云ふ意味ではなく、筆者の腦中に在る大凡そながらの標準に合格しなかつたらだと思ふのが至當であるが、或る單純な標準を設けて置いて、之に合格しないものは、一切採用しないと云ふことになる、或他の方面から見て意味ある材料を惜氣もなく棄てることになり、爲に或は實用に遠ざかり、或は無味に陥つて、地理専門の大家の非難を免れ得ても、吾々多數の俗人や、全國多數の學生兒童には歡迎せられないと云ふこともある。

産額は比較的少く、工場の規模は左程大きくなくても、博多人形は福岡市の

誇りは一つに相違ない。高貴の方々が岡市に御泊りの際、御旅情を慰め奉る一方法として、地方の官憲が特に人形製造家を呼出して、博多人形製作の實況を御覽に供へしめることが往々行はれる。從來其の光榮に浴した人は、博多人形の元祖とまで稱せられた先代井上清助氏其の人である。元來博多人形は、後陽成天皇の慶長十三年、筑前の國主黒田長政が福岡城を築いた時、城瓦の製造者正木宗七幸弘なる者が、瓦土を以て人形を作り、是を黒田家に献上したのが起元である。併し博多人形の名聲を高めて今日あるを得しめたのは、實に井上清助氏の努力の結果で、氏が博多人形の元祖と呼ばれるのは其の爲である。予は先年福岡市に出講した時、少閑を得て、同氏の門を叩き、工場を參觀して、直接同氏の苦心談を聴き、以て氏が氣骨ある實業家であり、又着眼の非凡な紳商であることを知り得た。氏が當代の名家二十有餘名を名譽顧問として、常に其の指導を受け、書齋には斯業に關係ある和漢の書籍を山積し、獨逸書英書をも備へ、尙外國の月刊雜誌にまで目を通して居られることを聞いて、如何に業務に忠實な人であるかの一端を窺ふことが出来た。今や博多人形は

氏の苦心經營の結果として、玩具的人形や地理、歴史教授用の人形類は言ふに及ばず、商業上の廣告に利用せられる實用品も製作せられ、尙富豪紳士の室内裝飾品となる可き美術的製作品も作られる様になつて居る。其の後予は氏の工場を參觀する機會を得ないが、農商務省主催の工業品展覽會や各地の博覽會に於ける氏の出品を觀、先年參觀の時に比して、更に一新生面の開けて居ることを知り、博多人形に對する敬意を強めて居る次第である。

久留米市に第十八師團司令部あることは、同市の一誇りとして、將又吾人の常識として知つて置く可きものであらう。併しそれ以外には何も得ることはない。つちや足袋も同市の誇りの一として、之を紹介して差支がないのみか、若し倉田氏創業以來の苦心の一端を知れば、其處に貴い教訓のあることを知り得るであらう。九州大學も博多人形も福岡市の誇りの一つであるが、九州大學ありと知り得た單純な獲物よりも、井上氏苦心經營の人形談の方が、一種の教訓が潜んで居るだけ教育的の意義が深いとも言へよう。一派の人には産物を論ずる場合に、往々其の産額の多少のみを過敏に考へる癖があるが、吾

吾多數の俗人仲間には、産額は左程多からずとも、存外有名で、しかも教育的意義ある地理材料が少くない様に思はれることもある。單に産額の多少を以て、各地の産物を選択することにすれば、本邦各府縣の産物中、第一位を占めるものは、大抵米であるから、どの縣の産物を擧げる時にも先づ米を擧げなければならぬ様になる。流石に毎縣米を載せることは、ウルサイと氣附いて居る爲か、府縣毎に米米と並べ立てる様なことはしない様である。して見れば或點に於ては吾々俗人と、着眼に非常な相違がある様にも見えるが、或點に於ては丸切り一致しないのでもない、と悟り得る所もある譯である。

兒童の苦限免除期

單に山あり、川あり、寒し、暑し、産物多し、良港あり、中心都市なり、と自然、人文の狀態を素直に、平凡に紹介するのを以て、地理書の本領と心得、又之を以て地理教授の任務なりとする人々は、兒童の程度、趣味を顧み、實用方面を顧慮し、教育的意義ある材料をも尊重する地理書乃至地理教授を見て、趣味化し、訓育化せる低級な地理と多少輕蔑の眼を以て眺めないとも限らない。併しそれを苦に

して、かゝる方面の研究を棄てるには及ばない。元來地理には、大體二通りの態度があるのである。其の一つは、地表の狀態有りの體を紹介する態度で、山川、湖海、平野、都邑等の位置、名稱を並べ、氣候、産業、交通等の狀態を抽象的な記述によつて、申譯的に説く流儀である。之に對して他の一つは、單に各地の地形、氣候、産業、交通等の狀態を決算報告的に紹介することのみに満足せず、其の地、其の地の人々が、一方に於ては自然界の支配を受けつゝ、他方に於ては或は自然を利用し、或は之を制馭して種々様々の施設經營を爲し、以て人類の利益、幸福の増進を圖りつゝあるかをも紹介せんとする態度である。前者の態度を執る人が、後者に屬する地理を見る時には、材料如何によつて、或は趣味化する地理と評し、或は訓育化する地理と見る場合もあるであらう。同様に後者の態度を執る者の目には、前者の地理が意味の少ないものと見えるであらう。之は舊劇を好む人の目には、新派の芝居がツマラナイものと映り、新派系統の人には舊劇が古臭いものに思はれるのと同様である。劇に舊新二派が現存して居るが如く、地理にも二つの態度が事實存在し

て居るのである。どちらも現今の世の中に必要な爲と見てよからう。然らば、國民教育上より地理科を見た場合に、何れの態度を執る可きか。の問題に移らなければならぬことになる。普通教育に於ける地理科は地理學專攻の人を養成する爲のものではない。人を教育する爲の道具の一つとして、之を課するのである。單に多くの地名や産物の名を知つて居る人を拵へる爲ではない。一般國民の常識として心得て置く可き地理的智識を備へ、内外國々勢の大要を知らしめ、以て愛國心の養成に資せんが爲のものであることは、教則にも示されて居るのである。

すれば小學校の地理材料として、實用的のもの、趣味的のもの、訓育的のものが混在してゐても差支がないばかりか、寧ろ教育的意義の深いものと見てよいと思はれる。唯、此處に山脈あり、平野あり、川あり、中心都市あり。故に之を記憶せよ。と迫り、氣候溫和にして、産物多く、交通は便利なり。故に之を忘る可からず。と云ふ態度を以て、三年も四年も無味乾燥なことばかりを教へられたならば、特に地理に興味を有する者は兎に角、さもない者は地理科を以て、ウルサ

イ學科と思ふの餘り、遂には、地理科の苦患免除期は小學校卒業の時に在り。と觀念する様にならぬとも限られない。

執る可き態度

かく論じて來ると、後者の態度を執れば、果して教則に所謂愛國心を養成し得るものか。との疑問が生じて來る。毫も他の方を藉らず、單に地理科のみによつて愛國心を養成し得るものではない。元來愛國心の養成法として成立つて居る一定の方案は無いのである。若し一定の方案によつて、愛國心を養成し得るならば、愛國心の養成に就いて心配する必要はない。一定の方法が立たない爲に、總ての學科が有らゆる方面から、直接、間接に其の一助たらんことに努めつゝあるのである。地理學の專攻者が孜孜として、研究を繼續し、或は前人未發の理法を發見して、國家の名譽を高め、或は世人を指導して、國益を増さしめるのも、愛國的行爲に相違ないが、かゝる人々を養成するには、夫れ々の機關が備はつて居り、又其の指導に當る可き資格ある人が、別に備はつて居るのである。元來地理學專攻の人は、趣味が有らうが、無からうが、實用になら

うが、なるまいが、そんなことは氣に懸けず、凡そ土地に關する事柄は何でも心得て居らうと、實に忠實に研究するものであるが、さらばと云つて、小學校の地理科で、無味乾燥な材料ばかりを、よりによつて教へる必要はない。地球を人類活動の舞臺として、各國各地に行はれつゝある施設經營にも着眼し、以て各國各地の人々が如何に國利民福の爲に、尙又社會文化の爲に努力しつゝあるかを紹介し、地名、産物等をして單なる地名、産物たらしめず、意義ある地名、産物たらしめ、殖産興業上、倣す可き人に對しては敬意を拂はせ、國利民福増進上、尊重す可き事業に對しては、尊敬の念を浮べさせる様に指導するのが、國を思ひ、家を思ひ、國家と喜憂を共にする愛國の志士を養成する道をたどる所以になるのである。随つて後者の態度を執る方が、國民教育上意義あるものと思はれる。固より後者の態度を執るからと云つて、愛國心養成の全部を引受け得るものではないが、所謂愛國心の養成に資し得るものと見られるであらう。

浦和に埼玉縣廳あることも、久留米に第十八師團司令部のあることも、國民の

常識として知つて置くべきものである。併し單に常識として心得て置けば足ると云ふものばかりを列擧することになると、兒童の多岐は、地理科の苦患免除期の一日も速ならんことを望む様になつて、愛國心の養成に資することすらも出来なくなる虞ありと言ふことになる。自然執る可き態度は後者に在りと云ふことになるが、若しそれが爲に、他日地理學を専攻する人に對して、障礙を残す様な心配があるならば、多少考へなければならぬが、さう云ふ懸念は毛頭ない。

土地によつては、現在特に誇りとす可きものゝ無い處もあるから、所謂無い袖は振られぬものと諦めなければならぬ。併し現今の地理書や、地理教授には、往々紹介す可き價值ある誇りを看過して居る缺點があるから、人も吾も此の點に一層の注意を拂ひたいと思ふ。久留米に久留米の誇りあるが如く、熊本には熊木の誇りがあり、英國にも誇りがあれば、米國にも誇りがある。其の誇りには自然地理上のものもあり、又人文上のものもあるが、教育上より見れば、人文地理上の誇り、特に人の努力の結果が表はれて居るものが貴い様に思

はれる。

地理書以外の書物にも地理材料あり

假りに、如上の卑見を是認するとすれば、多数の人々は先づ攻撃の鋒先を地理の教科書に向けるであらう。併しそれは酷である。中等程度の教科書も小學校用のものも、其の定價を低廉ならしめんが爲に基づく紙數の制限もあり、又活字の大きさにも制限があるのであるから、如何に大抱負を懷いて居る大家でも、筆を教科書に執る場合には、是等の制限に拘束せられて、自己の抱負を充分に表はすことは出来ないのである。さすれば次には参考書として提供せられる地理書に對して、不満の聲を放ちたくなるのが自然であるが、是は著者、其の人の地理に對する態度と着眼の如何によつて、萬人の要求に一致しないものが出て、致方はないと諦めなければならぬ。それと同時に吾人は、相當の地位あり、名望ある人の手に成つた地理書には、何處かに敬意を拂ふ可き記述あることを認めて、假令全部が吾人の要求に合致せずとも、廣く参考書を繕くことを怠らない様に心懸けなければならず、又特に地理を標榜してゐ

ない書物や雑誌などの中に、尊重す可き地理材料の潛んで居ることに注意しなければならぬ。

以上の卑見を讀んだ人の中、或筋の地理に關係ある人が、予の知人に向つて、北垣氏の土地の誇りに對する意見を見ると、自分等の考へて居る地理から見れば地理ではない。地理の色彩を帯びた修身談、若しくは修身的地理談と評す可きである。と云ふ意味の批評を試みられたと云ふことである。定めし其の御當人は予の卑見を輕蔑し、手嚴しい批評を下した御積りであらう。併し之は固より豫期してゐたのである。前に掲げた短篇を執筆して居る時から一派の人は、趣味化し、訓育化する低級な地理と見るだらうと豫測してゐたのである。豫期の通り其の人が豫測した意味の批評を下したのであるから、予は之を、我が意を得た批評と見て居るのである。

世に地理學上の物識りは澤山ある。暑し、寒し、中心市場なり、交通便利なり」と云ふ様な叙述を並べるのが地理であると考へ込んで居る人も少くはない。其の系統の人の目に、予の卑見が「修身的地理談」に映ずるのは當然と思はれる部分があるのである。地理を以て國民を教育しようとする一教科と見る場合には、單に地理學上の物識りを養成すると云ふ態度ばかりでは、到底目的は達し得られない。各國各地の自然、人文兩方面の地理を紹介しつゝ、一方に於ては地球の表面を人類の活動舞臺として様々の施設經營を爲しつゝ、ある近來の世相を理解せしめ、内外各地の長所を認めて、或は之を反省の種とし、修養の資料とする様に指導しなければ、地理科は教育的價値の乏しいものになつてしまふ。敬す可き事柄に對しては尊敬せしめ、警戒す可き事項に對しては警戒を加へ、獎勵す可き事業に對しては獎勵する所に教育的價値が

存して居るのである。地理に修身的色彩を帯びた材料の加はること
を不思議に思ふ様な人々は、共に國民教育の地理科を談ずるに足りな
い人である。教育の實務に當つて居る教育家が頻りに「生きた地理を
要求して居る。其の所謂「生きた地理」は單に地名や其の位置や、産物の
名稱等を數多く並べて、餘處々々しく各國各地の地理的事項を列擧す
る地理ではない。各國各地の地理を紹介すると同時に、我が國將來の
國民を啓發指導す可き威力を備へて居る教育的意義の多い地理であ
る。之を大袈裟に言へば、經世的色彩を帯びた地理と謂つても差支は
ない。

第七章 經世的態度

一、尊敬す可き地理學者の態度

其の職に忠實な人が多い 凡そ學問を以て身を立て、世に重きを爲して居る人には、名利の慾を離れて、明けても暮れても自己專攻の學問の研究に没頭し、殆んど寢食を忘れんばかりにして、一身を學問に捧げて居る人が少くない。地理學に於ても同様で、一生涯を氷河の研究に委ねて居る人もあれば、終生湖沼の研究を續ける人もある。又全力を火山の研究に注いで、灼熱した熔岩が溢れて居る噴火口を年中調査して居る人もあり、大噴火や大爆發が起ると、危険極まる焦熱地獄の様な場處をも意とせず、眞先に調査に出かける火山學者もある。或は天

候が險惡になれば、晝夜の別なく、風雨と戦ひながら其の觀測に當る氣象學者もあり、大震、大火に遭うて、自分も罹災者の一人でありながら、燒残りの觀測臺を本城と心得、不眠不休で觀測に従事する地震學者もあり、年が年中、地形に苦心して居る地形學者もあり、或は是等各分科の研究報告は固より、地理に關する内外の圖書、雜誌、旅行記、探檢記、各地案内記、廣告類に至るまでを讀みあさり、尙餘暇があれば、實地の視察、見學に従事する地理學者もある。其の專攻の學問に對して忠實な態度は實に敬服の至りである。此の心を以て心としたならば、何れの職業に従事してゐても、自ら自己の運命を開拓して、向上發展を期することが出来るに相違ないと思はれる。かく考へて見ると、其の職に忠實な學者の態度は、實に崇高森嚴な感じが伴ふ様にまで思はれる程に貴い態度で、天下萬人の模範とす可き價值がある。

所で、地理學全體に目を配うて居る地理學者の中にも、それ／＼の長所があつて、自然地理を主とする人もあれば、人文地理に傾く人もあり、又力を兩方面に對して平分に注ぐ人もある。内外古今の一般地理學者を通覽すると、大抵は此の中のどれかの系統に屬する様に思はれる。然るに地理學を根柢として、常に内外各地の動靜に注意し、各國の狀勢を洞察して、確固たる意見を立て、賀す可きを賀し、敬す可きを敬し、憂ふ可きを憂ひ、怒る可きを怒り、警む可きを警めて、國家、國民の處す可き道、執る可き方針を誤らしめない様に努力して居る地理學者は極めて少い。少いけれども此の系統の地理學者を予は假りに經世的地理學者と名づけ、其の學問を經世的地理學と呼んで、話を進めることにする。

經世的地理學は高言放論の學ではない　予の所謂經世的地理學に於ても、各國各地の自然、人文兩面の地理材料を説くことは、普通の地

理學と變りはない。山も川も、平野も海も、氣候も産物も、交通も都邑等も皆其の材料である。併し單に是等の材料其の物を知るのが終局の目的ではないのである。是等の智識を與へた上、其の智識を材料として、全世界の人類が、或は學問の力を藉り、金力を藉り、機械力を利用し、又渾身の努力を惜まらずして、國利民福を圖り、又物質的文化的發展を期しつゝあるかを説き、或は國家、國民の着眼如何によつて、盛衰治亂の顯著に表はれて居る現状を紹介し、或は國際關係の親疎を述べ、又我が國が世界各國に對して執る可き方針を論じ、我が國民が異種の民族に對する態度を顧みると云ふ様に、地理を以て單純なる地理に終らしめず、是を以て國民を啓發し、指導し、訓練し、教育する學問たらしめようとする態度の地理を、假りに經世的地理學と名づけて居るのである。

所で、地理學の分類表を見ると、經世的地理學などと云ふ名目は一向

見えないから、學問としては成立たないものと嘲笑し、問題になるものでないとする人が必ず有るだらうと信ずる。予も現今に於ては經世的地理學なるものが、學問として成立つて居るとは思つてゐない。便宜上假りに斯様な名をつけて見ただけであるから、之を地理教授上の一方針と見てもよい。世には學者でなくて國を益し、世を利用する人もあり、學問としての體を備へないもので、國家、社會に貢獻するものがある様に、學問としては、成立たない教授上の一方針でも、それに教育上棄て難い意味があるならば、決して輕蔑す可きものではない。經世的眼光を以て地理を説き、是によつて國民を啓發し、教育しようとする態度は、誠に望ましいことであるが、從來の一般地理學には其の色彩が極めて薄く、小學校の地理科には殆んど全く無いと見てもよい。小學校に於ける將來の地理科は、固より小學校相當でなければならぬが、經世

的色彩を帯びたものにしなければ、教育的意義の少いものになると思ふ。唯深く注意しなければならぬのは、肯綮に當らない空理、空論、大言、壯語を弄しないことである。予の假りに所謂經世的地理學は、高言、放論の學ではない。

二、尊敬す可き經世的地理學者

尊敬すべき地理學者は多い 平生、予が衷心尊敬の念を禁じ得ない地理學者は中々多い。其の中には經世的眼光を以て地理を説く人も無いではない。折に觸れ事に應じて其の閃きの見える學者がある。予も其の閃光に接觸したことがあればこそ、斯様なことを述べる緒を開かれたものである。併し師弟の關係ある學者や、同窓の先輩を紹介すると、それ等の人に對する阿諛諂佞と見る人が無いとも限らないか

ら、丸切り何の關係も無い學者で、其の著書や講演を通して、予の所謂經世的地理學の色彩の極濃厚な大家だと思つて居る學者を紹介することにする。それは有名な志賀重昂先生である。

志賀先生は一大經世家

矧川志賀重昂先生は、三州岡崎の生れ。

今の札幌大學の前身たる札幌農學校の出身である。同校の卒業生中には、專攻の農學以外に、幾多の長所を備へて居る俊才が少くない様に見えるが、志賀先生は慥に其の一人であると思ふ。

先生は詩人ではない。併し詩を賦することは縦横である。文人でもないが、其の文章は異彩を放つて居る。書家ではないが、其の書に一種の氣品が籠つて居る。外國語學者でもないが、能く數箇國語を談じ、殊に英語が巧である。演説家ではないけれども、東奔西走、南船北馬、全國各地の講演會に熱辯を揮つて、殆んど席の暖まる時がない。軍學者

ではないが、陸海軍に重んぜられ、外交家でもないが、國際的會合に參列せられることも少くはない。かくて毎年元旦に發送せられる年賀狀が、國の内外に亘つて、無慮數萬通の多きに上ると云ふことであるから、其の交際の廣いのに驚かざるを得ない。探檢家ではないが、足跡は六大洲に普く、歴史專攻の人でもないが、能く内外の歴史に通じて、名論卓説を吐かれる。地理學のみに没頭せられて居る譯でもない様であるが、内外國の地理に精通し、殊に人文地理學の造詣が深く、他の追隨を許さぬ見識を備へて居られる。著述に主力を注いで居られるのであるが、其の著書が一度出ると、洛陽の紙價が高まる。特に記憶術を練習せられた譯でもあるまいが、常人の企て及ばざる記憶力を持つて居られる。考へ來ると、先生は實に博識多能、八宗兼學とでも謂ふ可き非凡の偉人である。

惟ふに、先生を單なる講演家とし、單なる交際家とし、將た又單純なる探検家、歴史家、地理學者乃至著述家とするのは、皆中らない。是等は唯先生の行動の一方面を觀察したものに過ぎない。況んや詩書文章の如きは、先生に於ては各々一末技たるに過ぎない。予は常に先生を一大經世家と見て居る。蓋し先生が時に著述に従ひ、時に歴史を談じ、地理を説き、或は探検家となり、軍學者となり、講演家となり、又交際場裡に出入せられるのは、皆維れ一世を指導して、國民の眼光を遠大ならしめ、邦家永遠の國是を確立せんとする經世的念慮の發露に外ならないと信じて居るからである。しかし先生は常に自ら老書生と曰つて居られる。其の謙遜なるに驚かざるを得ない。斯様に博識多能な經世家を、經世的地理學者と言ふのは不當と見る人もあらうが、先生の言行の根柢が地理に在る。其の上東京地學協會の評議員でもあり、英國の王

立地學協會の名譽會員でもあり、やんごとなき御方の御前に召されて、講演せられた事柄も地理に關する事柄であつたと漏れ聞いて居るから、地理學の立場に立つて、先生を眺める時には、經世的地理學者と言ふより外に、善い言葉が見付からないのである。強ひて求めるならば、經世に代ふるに警世を以てする位のものであるが、先生の行動を熟察すると、矢張り經世の方が良くはまる様に思はれる。

意表に出づる先生の行動

明治十九年アフガニスタン問題で、英

露二國の國交が將に破れんとした時、英國は露國の極東根據地に備へんが爲に、軍艦を朝鮮海峡に派遣して、同海峡中の要害たる巨文島(ポルト、ハミルトン)を占領したことがある。其の時先生は單身獨力對馬に渡つて、其の狀勢を視察せられた。翌年西洋列強が、南洋諸島を分割しようとした時、直ちに濠洲、南洋方面を巡視せられたのも先生である。

近年我が委任統治の下に置かれ、燐礦を以て有名なアンガウル島の如きも、當時既に先生の詩題となつたものである。同三十一年我が國が清國から福建省非割讓の宣言を得た時、福建鐵道敷設地を踏査せられたのも先生である。降つて同三十七八年日露開戦のことあるや、或は黃海に帝國海軍の戦況を視察し、或は旅順、要塞攻圍軍司令部の人となり、平和克復後、樺太に於ける日露境界劃定の事業に参加し、獨木舟に棹して幌内川六十五里を航下し、以て其の可航を證せられたのも先生である。其の際日露兩國人夫の體力を比較して、我が人夫等の大いに劣れることを知り、我が國民の體力増進に關する建議書を、時の文部大臣(牧野伸顯氏)に呈せられたのも先生である。同四十三年南米亞爾然丁共和國が、其の獨立百年記念祭を舉行し、我が軍艦生駒が其の祝典に參列した時、先生は之に便乗して同國に渡り、國都ブエノスアイレス(善き空の意)

に開かれた亞米利加會議に列席せられた。其の前後先生の視察せられた處は、モリリシヤス諸島、喜望峯、伯刺西爾、ヴェルデ、カナリヤ兩諸島、歐洲諸邦、埃及、馬來半島等に及んだ。

大正元年米國に於て、排日論が沸騰すると、先生は先づ加州に渡つて、其の狀況を調査し、更に布哇在留本邦人の請に應じて、布哇各島に巡講し、同三年復布哇に渡航して馬哇地方に巡講し、更に加奈陀を視察し、尙米國を経て玖馬共和國に航し、更に内亂中の黒西哥を視察せられた。其の間、或は在布哇日本小學校教科書の編纂方法を具體的に立案して、布哇に於ける同胞十餘萬の永住を企圖し、或は米國に於て「日本人を忘恩國民」と評することを知り、日本に於ける米人の功業」と云ふ表を印刷して、之を米國到る處に配布し、或は書を在紐育日本新聞社に寄せて、ロド、アイランド州ニューボート市に於ける水師提督ベリーの生家、墓

地銅像に對して、我が開國の恩人たることを表明す可き記念物を設くるの議を提出し、以て日本人が忘恩國民ならざる實を示し、尙米人間に、日本人は、其の移住國に對して、勞働以外何等の貢獻を爲すことを知らざる國民なり。本國より鱈一疋移殖する者もなし。」とする非難あるを知るや、米國上流人士の嗜好物たるテラビンの材料として、日本の鮎籠を用ふれば、一層の美味として、賞味せられるに相違なしと思ひ付き、之を米國全土に移殖せんことを企てられた。

加之、我が長篠戦争に酷似せるアラモ戦争の遺跡たるテキサス州サンアントニオ町アラモ寺に、殉難烈士の碑を建設して、意氣に感ずるは東西同一なることを示された。其の碑石は先生の郷里岡崎産の花崗石で、高さ六尺、幅二尺のもの、其の臺石は長篠の勇士鳥居強右衛門の墓畔に得られたものである。歸來先生は「アラモの戦」を叙したる印刷物

七千部を知人に配布せられた。所が此の美舉を傳聞したる在米の某日本人が匿名で、建碑費用の補ひにもと金若干を寄贈した。然るに先生は之を私せず、本邦人將來の移住地として、最も有望なる南米紹介の費用に充てることとし、南米航路を開いてゐる東洋汽船会社の理事と協議の上、幻燈の種板を作らせ、東京赤坂三會堂に都下の名士一千人を招いて、南米紹介の幻燈會を開かれた。其の後大正十一年には排日熱の最も高い本家本元たる英領南阿弗利加聯邦を視察し、其の總督スマツツに會見を求めて、其の不法を論じ、辭去南米に向ふ航海中、之に關する長文の書信を認めて同總督に送られたのである。かくて南米諸國を巡視した上、大正十二年春歸朝せられたが、程なく皇族講話會に召されて、講話を爲すの光榮を荷はれた。新聞紙の報ずる所によれば、先生は同年十二月下旬印度及び西藏の視察に向はれたと云ふことである。

かく先生は屢、海外視察に出られるが、いつも先生獨力の計劃で、少しも政府の内命もなければ、補助もないと云ふことである。經世的念慮の強い人でなければ出来ないことである。尙先生には常人には到底出来ない著書がある。先生の著書には地理學、日本風景論、世界山水圖説、續世界山水圖説等著名のものが澤山ある。世界山水圖説の如きは、其の収益全部を擧げて、地理調査費用に提供せられた義侠的出版物として世人の夙に知悉して居るものであるが、茲に特に紹介して置きたいのは、大正七年以來年々出版して居られる國民當用世界當代地理である。本書は紙數六十餘頁の小冊子であるが、簡結に世界の近況及び重要事件を説かれたもので、先生の非凡な着眼、見識が隨處に閃いて居る。最初本書が発行せられた時、先生と同郷の深田三太夫、千賀千太郎、谷川岩吉の三氏が、本書の出版費を寄贈せられた。先生は三氏の厚志

を傳へんが爲に、全國の教育會、青年會、その他一切の公共團體には、其の申込に應じて本書を寄贈することとし、一般の人々には僅か定價十錢を以て販賣することにして居られるのである。所で茲に特に注意すべきことがある。それは本書寄贈の依頼書を端書で差出すと、如何なる公共團體にでも先生は寄贈せられないと云ふことである。之にも譯がある。即ち古來我が國では、封書でない一枚紙に認めた書信は、口上書と云つて、武士仲間では目上の人に差出す可きものでないとしてあり、西洋では未知の人に、端書で物を要求することを、以ての外の無作法として居るのである。先生は本書發行の際、此の美はしい作法を世人に知らせようとの考から、最初本書の廣告を、内地は固より滿洲に至るまでの新聞二百十三種に載せられた時、公共團體には無料で寄贈する旨を記された上、特に端書にての要求に對しては寄贈不致候。」と明

記せられたのである。然るに端書での要求が續々來るので、改めて東京の新聞紙に端書にて要求せらるゝ如き士禮を辨へざる團體へは不差出候。」と廣告せられた。併し端書を以ての要求がまだく止まない。そこで今度は東京朝日新聞に全一頁大の廣告を出し、日本のサムラヒは未知人に開書を以て要求するを不法法と認む。歐米の紳士淑女は未知人に端書を以て要求するを不法法と認む。」と明記せられた。それでも端書での要求が今に絶えないと憤慨して居られる。先生が些細な點にも注意して、世人を非禮、不法法に陥らしめぬ様に導かうとして居られることが、此の一事でも分る。

今日でも高等商業學校などでは、特に手紙の書方を教へて、非禮、不法法のない様に指導して居るやうであるが、其の他の學校では、上は大學より下は小學に至るまで、手紙の認め方を教へてゐないのが多いから、

何も知らずに不法法な手紙を書いて居る人が少くない。之は、生活に即する教育が必要だなどと口走りながら、空理、空論ばかりに浮身を窶して居る教師が多いからである。又教育家でありながら、當然出す可き禮狀を出さない人が往々あるが、之も良くないことである。

さて、志賀先生は、自宅に地理調査會假事務所を置いて居られる。此の會は明治四十四年五月の創立であるが、爾來一會員を募らず、一會費を徴收しない會である。其の會の一事業として、外國事情の質問に應ずることにして居られるのであるが、依頼者は紹介も無用、報酬、手数料郵便返送料、其の他一切の金品を差出す必要もないことにして居られる。又依頼者は同會に出頭しても、或は書面を以てしてもよいのであるが、出頭する場合には、先づ電話か書面で同會主任の在否を問合せ置くかないと、無駄足を踏むことがある。茲に質問に應ぜられる項目を

擧げると、左の通りである。

- 一、各外國事項の調査。
- 一、各外國への旅行案内。
- 一、各外國行に關する心得。
- 一、各外國行に關する參考圖書の質問。
- 一、在外日本人事業の調査。
- 一、在外日本人の宿所及び職業調。
- 一、旅券下附に關する質問。
- 一、旅券下附の成否鑑定。
- 一、各外國行郵便物宛名の認。

以上は過去約四十年間に於ける先生の行動の一端を述べたに過ぎない。しかも先生が經世的眼光を以て、各國各地を踏査し、常に地理學の見地から國民を啓發指導しようとして居られる徹底的な態度の一斑を窺ひ知るとが出来る。予が先生を一大經世家と言ひ、經世的地理

學者と稱するの無理ではあるまい。先生は體軀偉大、身體強健の人であるが、昨大正十二年の春南阿聯邦、南米等の視察を了へて歸朝せられた時の講演中に、たしか糖尿病の爲に、體重が減少したと話された。併し其の意氣の旺盛なことは少しも以前と變らず、又南阿に於ける排日の實況、スマツツとの會見談、我が國人に對する警告などの講話は、いつもながら實に力の籠つたもので、其の元氣な熱のある講演振りは既に耳順を越えた人とは思はれないばかりか、逆も壯者も及ばないものであつた。滿堂の聽衆は老若男女共に先生の非凡な着眼、遠大な抱負に敬服したことであつたが、つまり先生の講演は、南阿、南米の單純なる地理談ではなく、地理を説きつゝ、先生の經世眼に觸れた其の地くの施設經營を論議して、我が國民を啓發指導しようとする熱が溢れて居るからである。持つて生れた天稟が無くては、到底眞似ることの出来

ない偉人の一人である。西洋紀聞を見ると、寶永年中日本に來た羅馬の宣教師が、新井白石に會つて、貴公は五百年間に一度出る人物だ。」と賞讃したと云ふことがあるが、蓋し志賀先生も五百年に一人位しか出ない人物であらう。茲に國家の爲に、先生の御健康を祈つて、本章の終りにする。



第八章 地圖に親しましむ可し

一、地圖は最も大切な教具

先づ地圖の手入れが必要。地理の教授を有力にする爲には、種々様々の教具が必要である。就中最も必要なものは地圖で、地圖を離れては地理教授が成立たない。所が吾々の幼年時代を顧みると、掛地圖もなければ、兒童用の附圖もなしに、地理を教へられたものである。今から其の當時を追懐すると、時勢とは云へ、誠に變則な地理教授を受けてゐた譯である。今日の兒童が數十年後になつてから、現在の地理教授を顧みて、之と同じ様な感想を述べる様なことが出来るであらう。さう思ふと、今日の仕事が御粗末にはならない。

今は教室用の掛地圖も、兒童用の附圖も、文部省から發行せられる様になり、各學校に掛地圖を備へるのは勿論、生徒もめい／＼附圖を持つ様になつて居る。教へる人も、習ふ者も共に便利を得て居る譯であるが、地理の教科書は改訂せられても、附圖には少しも修正を加へずして、一昔も前の附圖を其の儘あてがつて置く様なことを、長く續けて居ると、後世必ず、自分等の幼年時代の地理教授には不便なことがあつた。教科書が改訂になつても、附圖は矢張り元の儘のものをあてがふのであるから、附圖には載せられてゐない地名が教科書に出て居る。鐵道が延長しても、附圖は矢張り元の儘と云ふ次第であつた。しかも小學校教科用圖書が國定制で、政府が自ら其の編纂に當つてゐた時のことである。など云ふ笑ひ話の種になることであらう。

併し、今日は國費多端の折柄でもあり、又種々雑多な事情の爲に、毎年

附圖を改訂する譯にも行かないのであるから、面倒なことではあるが、必要に應じて地圖に手入れをする様に心懸けなければならぬ。

一、手まめに地圖を見る躰が大切

専門家の讀圖力には敬服

古來、地理學者や地理教授法を説く人

が、讀圖の必要を高唱して、地圖は賢者の石なり。若し賢者に會はずんば、單に石たるに止る可し。地圖は吾人に秘密の言語を以て語る意味畫なり。されば先づ此の意味畫の言語を充分了解せしめざる可からず。などと曰つた人もある。如何にも其の通りで、地圖は點、線、記號、文字、色彩を用ひて地上の有様を平面上に表はしたものであるから、各國各地の地理に精通し、又讀圖練習を積んだ大家が、精密な地圖をジツト眺めて居れば、様々の地理的事項を讀み得るのである。随つて地理の

大家が専門の地理學者を養成しようとする場合には、讀圖練習を一つの大切な仕事と見るのは固より當然のことである。けれども地圖が地理的事項の全部を表はして居る譯ではないから、讀圖練習さへすれば、他は顧みるに及ばないと言ふ様に思ふならば、それは誤りである。

一體、地圖にも種々あつて、人文上の或事項のみを示すものもあり、自然地理上の或事柄のみを表はしたものもある。併しそれは特殊の地圖であるから、茲には論じないが、普通一般の地圖を見ると、自然、人文兩面に關する事柄が示してある。所で其の精密の度を比較すると、自然地理的狀態の方が、人文方面よりも強い。随つて精密な地圖を根氣よく眺めるならば、實地を踏査する前に、位置や地形の大體を大凡ながら頭の中に畫くことが出來て、實地に臨んだ場合に、豫想の大した外れはないものである。併し人文方面になると、地圖によつて知り得ること

は、鐵道の有無とか、村落、都邑の多少とか云ふ様な言はば皮相の部分に過ぎないから、實地に臨むと、地圖に表はれて居ること以外の獲物が非常に多いものである。即ち一般の地圖では、人文方面よりも、自然地理的狀態を讀ませる種の方が餘計に表はれて居るものである。斯様な譯のものであるから、讀圖練習を積んだ人が、陸地測量部の二万分の一の地圖の様な精密なものを讀んでは實地を踏査し、更に別の場處の地圖を讀んでは、其の地に臨むと云ふ様に、實地と地圖との比較研究を屢々重ねると、後には地圖によつて「かくく」なり。」と斷定した地形が、實地に就いて見ると、殆んど其の通りに展開して來る様になるのである。併し此の程度にまで練上げるのは中々の大仕事で、普通一般の人には望まれない。

かう云ふ練習の積んでゐない吾々は、地圖の上だけでは相當に地形

が分つた様に思つてゐても、實地に就いて見ると、豫想と實際とが大いに齟齬してマゴツクことが頗る多い。地圖の上では上から見下して、或範圍の土地全體を大觀しつゝ、局部々々を眺めて居るが、實地に臨んで見ると、山も丘も地圖の上では容易に想像の出來ない姿を備へて横に表はれて来る。それが邪魔になつて隣接地全體を見通すことが出來ない。地圖の上では單に、川が流れて居る。橋が架けてある。と考へて居るだけであるのに、實地に臨むと、川底が砂であるとか、岩底であるとか、存外緩流であるとか、豫想してゐない鐵橋が架かつて居るとか、魚類が澤山泳いで居るとか云ふ譯で、豫想以外のものが目に映ずる所から、地圖で豫想してゐた處とは、丸切り別の土地に臨んで居る様な感じのする場合が中々多い。又地圖の上では分水線が明瞭に認められ、山脈の本脈と支脈との別が明瞭に分つた様に思ふてゐても、山嶽重疊

の飛驒の山奥の様な處に這入ると、どれが本脈やら支脈やら容易に判定のつかない様なことがある。漸く地圖と實地とを對照して、頭を纏めると云ふことになる場合が多い。つまり學校の博物館に備へてある人間の骨格ばかりを見た目では、肉もあり、血も通ひ、着物も着飾り、化粧までして居る生きた人が全く別物の様に思はれるのと同じ様な感じがするのである。然るに讀圖練習の積んだ人、實地と地圖との對照を屢々行つた人になると、地圖を見て其の骨格を悟ると同時に、多少肉や血や着物などを補綴して考へる力を備へて居るものと見え、寫眞を見て置いて實地に臨んだ程には行かないとしても、丸切り別の土地に臨んで居ると餘處々々しくは思はず、馴染ある土地を眺めて居る様な感じがするものと見える。丁度吾々が新聞や雜誌に出る人物の漫畫を見て、之は清浦さんを書いたものだ。とか、犬養さんの演説振りだ。と

判断して誤らない様に、地圖を見て實地の真相の大凡そを飲込み得るものらしい。果して然りとするならば、讀圖練習の効果は實に偉大なものであり、又地理の大家が地理學者を養成したり、軍隊で將校を養成したりする場合に、讀圖練習を大切な仕事の一つに數へるのは誠に至當なことである。併し一般の人に對しては、程度の高い讀圖法を要求するのは、固より無理であり、又そんな必要はない。

小學校でも讀圖練習の聲が高い 讀圖力養成の必要は夙に小學校でも唱へられて居ることである。併し同じく讀圖と言つても様々の程度があるのであるから、小學校では兒童相當、附圖相當の程度に止める可きもので、専門の地理學者が考へて居る様な讀圖練習其の儘を小學兒童に適用す可きものでもなく、又それ程の必要もない。然るに讀圖力養成の必要を絶叫する人の中には、其の必要を痛切に感ぜしめ

ようとする所から、多數の小學校の教師が平生一向手にしない様な綿密な地圖を持ち出して、練習さへすれば、かくも細かな點まで讀み得るものである。と説明し、暗に小學校に於ける讀圖練習の幼稚なことを諷する様に見えることがある。それが相當の地位名望のある人の話である、と忽ち之に和して讀圖力養成の聲が全國の小學校に高まる。併し小學兒童がめい／＼持つて居る附圖を、専門家が常に座右に置く様な地圖に比べると、先づ物が違ふ。極大體の地形や位置や地名が示してあるだけの地圖を持つて居るのであるから、専門家が得意として居る讀圖法を其の儘適用し得る筈がない。又専門家は實地見學に先づ豫備の仕事として、先づ精密な地圖を廣げ、様々の方面から讀み得るだけ、地圖を精讀する場合が多いが、小學兒童には、そんな機會も無ければ必要もなく、又そんなに細かなことを綿密に調べる程度の頭に達し

てはゐない。仍つて一時は讀圖力養成を口にしなければ、時勢後れの様
様に心得て、一にも讀圖、二にも讀圖と喧しく言つてゐても、後には或は
無理なことを課してゐたとか、或は「かうまでしなくてもよい。」とか、出
來ないことを出来る様に思つてゐた。」とか悟りが開けて、漸く手頃な
所に落着くのである。つまり兒童相當、附圖相當の手頃な程度の讀圖
を怠らしめない様に心懸ければ良いのである。

寧ろ地圖に親しましめん 學生、生徒の程度に應じ、又地圖相應の
讀圖は必要である。小學校用の附圖と雖も、地圖に相違なく、各種の記
號、文字、色彩等を見て、極大略にもせよ、地形や位置や地名を了解するの
であるから、地圖を讀むと言つても差支はないが、讀圖としては極程度
の低いものであるから、必ずしも「讀む」と言はないで、「見る」と言つても不
都合はない。若し「讀圖」と言ふ言葉を使ふ爲に、無理なことを課したり、

程度不相應な試みが行はれる心配があるならば、「見る」と言つてもよい。
さう云ふ言葉の詮議はどうでもよいことであるが、兎に角予は兒童を
面倒がらず、臆腔がらず、手まめに地圖を見る様にしつけて、地理談を聞
く時にも、復習をする時にも地圖を離れてはならないと思ふ様に導く
ことが大切であると思ふ。換言すれば地圖に親しみを持つ様にしつ
けることが必要である。

元來、日本人には地圖を見ることを面倒がる癖がある。随つて家庭
用として地圖を備へて居る家が多くはない。地圖に親しみを持たな
い人の方が多い。歐米諸國ではチャント地圖を備へて置いて、新聞を
見て居ても、雑誌を讀んでゐても、知らない地名が出て來ると、すぐ地圖
を開いて其の位置を確かめる人が多いと云ふことであるが、日本人に
はさう云ふ躰が充分出來てゐない。子供は殊に地圖を見ることを面

倒がるのか、無頓着なのか、教師が地圖を見る様に仕向けまいと、目の前に地圖があつても、之を見ようとする者が少い。其の儘で成人すると、トンダ間違ひを平氣で口走る様になる。本年正月千葉縣銚子に出講して數日滞在してゐた時に、隣座敷に二人連の客が泊つてゐた。どちらも壯年で、新聞も読み、算盤珠を弾く音も聞えてゐたから、少くとも嘗て小學校の教育を受けた者に相違ないと思はれた。換越しに聞える話から察すると、共に商人で諸處方々に旅行をする人らしかつたが、其の中の一人が利根川を眺めながら、此の利根川も矢張り東京灣に這入つて居るのか。」と尋ねた。すると他の一人が「さうだ。」と答へてゐた。かう云ふ様な間違をして居る人には度々出會ふ。嘗て神戸市の或旅館に泊つてゐた時にも、隣座敷に紳士らしい風をした二人連れの客があつた。其の一人が「布哇は何處の國にあるのか。」との問を發

した。布哇の位置をも知らないとは、身なりにも似合はぬことだと思ふてゐると、相手の一人が「布哇は阿波の國に在る。阿波十と同國だ。」と答へた。すると一方が「それなら日本人が大勢行く筈だ。近いんだから」と曰つて、布哇問題が落着した。かう云ふ人達は地圖には無頓着に地理を習つたものであらう。若し地理を習はなかつたとすれば、地圖を見ることを知らない人と見てよからう。かく地圖に無頓着な人を拵へては申譯がないから、小學時代から兒童が地圖に親しむ様にしつけ、尙卒業間際には、實社會に活動する時になれば、兒童用附圖では間に合はないことが多いから、家に何々と云ふ地圖を備へて置き、事に觸れ、物に應じて其れを見ることを怠るな。其の地圖以上に精密なものが必要な時には、かう云ふ地圖もあり、斯様な地圖もある。めい／＼家に備へる譯にも行くまいから、必要な時には學校に來て見るがよい。」

と云ふ様にした上で卒業させる様にしたものである。聞けば千葉縣の沿海地方の學校は、申合せの上、皆海圖を學校に備へて、其の見方を教へた上卒業させると云ふことであるが、漁業の盛な地方の學校としては、誠に結構なことである。かう云ふ様に利用せられてこそ、地圖が生かして使はれる譯である。

三、地圖の描寫について

地圖の描寫は意味ある仕事 兒童に地圖を書かせることは、念を入れて地圖を見るやうにする上にも効があり、又地理を習ひ終つた土地の地圖を描かせると、其の復習の一部にもなるから、地理教授上意味ある仕事である。随つて昔から、必ずしも精密なものでなくてもよい、畧圖でも、模寫でも、白地圖の記入でも結構であるから、兎に角地圖を

描かせよと要求して今日に至つて居る。予も畧圖を兒童に描かせることを大切な仕事と思ふて居る。

併し、必ずしも毎時間教室で畧圖を描かせるには及ばないと思ふ。若し有り餘る時間があるならば、教室で描かせるのも結構であるが、教授時間數に教材を配當して、しかも教育的意義の多い地理教授をしようとして見ると、特に畧圖を書く時間を割くことは出来ない。作業主義にかぶれて、畧圖を書かせさへすれば、地理教授の大半の役目を達するものゝ様に誤解し、殆んど教科書の記事其の儘を謄記させる態度を取るならば、教室で毎時間畧圖を書かせる時間も出て來よう。けれどもそれでは眞に意味ある地理教授は出來ない。昔、生徒が附圖を持たなかつた時には、無理にも毎時間畧圖を書かせる必要があつたのであるが、今日は生徒がめい／＼附圖を持つて居るのであるから、利用し得

るだけ附圖を利用して、教授を進めて行けば良いのである。かくして教室では畧圖を書く時間が無いとしても、家庭に於ける復習作業の一つとすれば、其の目的を達することが出来るのである。それ故作業主義にかぶれた小學校でこそ、毎時間畧圖を書かせ、其の他の小學校は勿論、中學校以上大學に至るまで、既成の地圖を利用し得るだけ利用しつゝ、成る可く意味の多い地理教授をしようとする努力して居るのである。併し毎時間畧圖を描かせること以上に意味ある地理教授をすることの出来ない人ならば、矢張り畧圖を書かせた方が良い。若し意味ある地理教授が出来ないに拘はらず、畧圖を廢したならば、それだけ損になる譯である。

然らば、教師が黒板に畧圖を書きながら地理上の説明をすることは如何かと疑問を挿む人もあらう。之は勿論結構なことである。生徒

は附圖を持つて居るが、今教師が説明しようとする事項相當の畧圖を黒板に書き、其の事項に對する生徒の注意を集め、又其の理解を助ける様にするとは、固より必要なことである。併し一旦理解したならば、其の畧圖を生徒が寫取らないでも、附圖に載せられて居るのであるから、理解し得た頭を以て、必要ある毎に附圖を見させることにすればよい。唯教師が説明の爲に書いて示した畧圖相當のものが附圖に出て居ない時には、其の畧圖を書き取らせて置く必要がある。

畧圖を寫し取らせる場合もある　児童が所持して居る附圖に表はれて居る通りと思へば、實際と相違する場合とか、或は教師が説明しようとするものが、附圖に表はしてないとか云ふ場合には、教師は略圖を描きつゝ説明し、説明し終つた後には、其の略圖を書かせて置く必要がある。例へば今日の児童用附圖はさう綿密なものではないから、香

港が支那の大陸に續いて居るものゝ様に書いてあり、シンガポールも馬來半島と陸続きである様に示してある。暹羅の盤谷も同名の灣頭に臨んで居るものゝ様に書いてあり、上海の市街も揚子江の河畔に在るものゝ様に表はれて居る。併し事實はさうでないものであるから、是等の土地を紹介する場合に、教師は縮尺三千萬分の一と云ふ様な地圖ではかう書表はされることになるが、實はかう云ふ位置に在るのである。随つて汽船はかう云ふ通路を経て此處に出入りするのである。と説きながら略圖を書示すか、或は備へてあるならば、其の部分の擴大圖を示す可きである。其の略圖や擴大圖は附圖には出てゐないのであるから、生徒に書取らせて置く方が親切である。斯様な場合は可なり澤山あるが、つまり附圖に表はれて居る通りに飲込めば、實際に合はない誤りになると云ふ場合である。

次に、教師が説明しようとするものが、附圖に表はれてゐない時がある。例へば大阪市の地理を説いて、本書第三章に述べて置いた毛馬の閘門による淀川の水位調節の設備を説明すると假定して附圖を見ると、淀川の川尻近くに、大阪市を示す丸が書いてあるだけで、淀川の本流と新淀川との別も示してないのである。それ故此の附圖によつて、毛馬の閘門を説明することは出来ない。随つて大阪市附近を特に明瞭に書表はした地圖を示すか、或は略圖を書いて説明しなければならぬ譯になる。或は富山縣の伏木を紹介する場合に、富山灣の要港なる伏木は米を積出すこと少からず、だけの説明ならば、附圖を見させるだけで用は足る。併し以前船着きの不便であつた伏木港も、築港の御蔭で、汽船が庄川河口の川岸に横附けになる様になり、米の積込みなども大層便利になつたことを説き、尙折角手を入れた港が浅くなるのを

防ぐ爲に、庄川本流を新湊を経て富山灣に導く爲の新水路を設けたこと及び高岡との水運の便利を圖る爲の伏岡運河の説明をもすれば、現在の附圖のみでは説くことが出来ない。矢張り教師が高岡、伏木附近の略圖を描きながら説明しなければならぬことになる。

斯様に附圖だけでは用が足りないから、別に略圖を示して説明を試みた場合の略圖は、其の都度教室で寫し取らせて置く必要があるのである。かう云ふ場合も随分澤山あるから、將來の附圖には重要な土地を特に精密に表はした切圖を挿む様にし、尙それを擴大した掛圖も文部省が発行する様にしなければなるまいと思ふ。今日民間で發行して居る部分圖が丸切り無い譯ではないが、多くは國語讀本に出て居る土地の略圖を示すものであるから、地理教授用としては物足りない點が多い。

さて茲に述べては、餘談にもなり、又愚癡話になるが、序に文部省發行の教室用掛地圖のことを一言述べて置きたい。文部省が掛地圖を發行せられる様になつてから、正確鮮明な地圖が比較的安價で求め得られることになり、此の點については、全國の小學校が常に感謝して居る。併し歐洲大戰後、新興國も出來、方々に國境の變更なども行はれて居るのであるから、修正を加へた地圖が出されさうなものだと鶴首して待つて居るが、容易に出されさうに見えない。幸に信賴す可き地理學者や製圖家が、何年版世界地圖とか、改造世界部分圖とか云ふものを出版して呉れられるから、多くの人は之によつて地圖に修正を加へて居るのであるが、若しかう云ふものが出なかつたならば、手入れに困る人も少くはあるまい。けれども地圖の手入れは、極簡單なものとは格別。少し込入つたことになる可なり面倒でもあり、又出來上りが見苦しい

から、矢張り小學校が困らない様に、手廻しよく、適當な地圖を文部省が發行せられるならば、小學校は非常に感謝の意を表し、流石に政府の仕事なる哉。」と感心することであらう。

四、先づ地圖の觀念を得させよ

簡単な製圖練習が先づ必要

兒童をして地圖に親ましめる様にしつける爲には、一般の地理教授を始める前に、先づ地圖とは如何なるものかを悟らせ、更に一般の地理教授に當つて、兒童の使用する附圖の成立ちの大略を心得させて置かなければならない。此の準備作業を課せられない者が、尋常五年生になつて、イキナリ教科書と附圖をあてがはれ、地圖を見よ。地圖を讀め。」と迫られても、目前に地圖を開いてゐながら、途迷ひばかりしてゐて、一向要領を得ないものである。之は

所謂「習はぬ經は讀めぬ。」の道理で、要領を得ないのが當然である。仍つて、一般地理に這入る前に、先づ地圖の何たるかを知らせて置く必要がある。

それには最初縮尺の必要のない品物の平面圖の何たるかを會得させることから導けばよい。即ち硯石でも、水入れでも、コップでもよいから、品物を示して兒童に其の形を書かせる。すると兒童は大抵其の側面圖か或は斜上から見下した鳥瞰圖を書くものである。そこで教師が此の品物を眞上から見下した時の形はどう表はせばよいか。と問をかけて、水入れなり、コップなりの平面圖を描かせる。かくして出來た圖は其の側面圖や鳥瞰圖とは丸切り別物の様に思はれるが、同一物も之を眺める目の位置の變化によつて、形に非常な相違あることを悟らせると同時に、平面圖と云ふ名も教へ、更に二三其の練習をさせる。

次ぎには、児童の持つて居る紙には、其の儘の大きさに書表はすことの出来ない大きさのもの、例へば机とか、大きな箱とかを示して、其の平面圖を作ることにする。すると到底實物大には書表はす譯には行かないから、縮尺の必要を悟らせ、實物の一尺を平面圖では一寸で表はすとか、五分で表はすとかの約束を設けて、縮尺を要する物の平面圖を描く練習をさせる。其の應用として教室や講堂などの平面圖を描かせるのも結構である。斯様にして平面圖や縮尺の觀念が出来たならば、今度は児童を高低起伏のある土地に連出し、將に平面圖に書表はさうとする範圍を定めて、其の境界線を地上につける。かくて先づ其の輪廓だけの平面圖を描かせ、次に起伏状態を表はす方法を授けて、簡単なから地圖を書かせる。さうして出来た圖も一種の平面圖に相違ないが、土地の平面圖であるから、之を地圖と呼ぶのだと教へる。

併し之だけの地圖では、方角が分らないから、方角の示し方も教へ、尙紙の上方を正北として書表はした場合には、特に方角を示す記號を書入れる必要の無いことも授け、尙其の際東西南北だけではなく、北東とか南東とか云ふ間位の名稱も教へるのである。

以上の如き順序によつて、平面圖、縮尺、地圖、方角の示し方を會得させた後には、更に児童を學校外の適當な場處に連出して、其の近邊の地形を観察させ、且つ其のあたりを表はした既成の地圖と對照させる。かくした上で適當な範圍の地圖を書かせる爲に、先づ場處を定め、步測或は實測によつて距離を測らせ、縮尺も定めて大體の地形を書表はさせる。其の上にて寺、社、學校、郵便局などの記號をも教へて、著しい建物の記入をもさせることにすれば稍體を備へた地圖が出来、同時に地圖の成立ちが了解し得る譯である。斯様にして地圖の觀念が出来た後に、尙

課す可き仕事がある。

兒童用附圖を見る練習

前節に述べた様にして、地圖に關する大體の觀念を得させただけでは、まだ一般の地理教授に這入る譯には行かない。兒童用の尋常小學地理附圖によつて日本地理を習ふことになるのであるから、其の地圖が如何なる記號を以て何を表はし、又如何にして土地の高低を示して居るかを知らせなければならぬ。それには從來の附圖では第一圖に出してある圖例を先づ調べさせた上、第二圖以下の地圖を眺めさせて、往時我が國に畿道國の區劃のあつたことも承知させ、現在の行政區分が必ずしも昔の國と一致してゐないことも悟らせて置きたい。尙此の際府、縣、郡、市、町、村の關係も大略授けて置かないと、兒童の中には府縣も市も同格のものゝ様に誤解する者もある。

次に任意の地方圖を開かせて、「何處かに温泉がないか。」「社は出てゐないか。」「何處に燈臺があるか。」と云ふ様に問を發して、其の所在を地圖の上で見つけさせ、諸記號を見る練習をさせなければならぬ。尙地圖上に於ける距離の測定練習をも課して、附圖を見る目が出來たならば、一般地理の教授に這入つて、附圖を見ながら地理の稽古を課することが出来る。

併し之だけでは、まだ兒童は地理上の熟語を知らないものであるから、一般地理の教授に移つてから、始めて熟語が出て來た時に、其の意義を明瞭に授けることを忘れてはならない。それが爲に教師は先づ教科書を通讀して、此處が此の熟語の出始めであり、初對面であると云ふ處に、朱線でもつけて置いて、熟語の説明に手落ちのない様にする必要がある。斯様に心懸けて居れば、地理に對する準備としての最低限は、地